

Oracle® Secure Global Desktop インストールガイド (リリース 4.7 用)



E35248-01
2012 年 8 月

Oracle® Secure Global Desktop: インストールガイド (リリース 4.7 用)

Copyright © 2012, Oracle and/or its affiliates.All rights reserved.

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアはさまざまな情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

概要

このガイドでは、既存のインストールをアップグレードする方法を含む、オラクル Secure Global Desktop ソフトウェアをシステムにインストールする方法について説明します。このガイドには、このソフトウェアの使用を開始する方法も説明されています。

ドキュメント作成日: 2013-01-04 (revision: 1406)

目次

はじめに	v
1. 対象ユーザー	v
2. ドキュメントの構成	v
3. ドキュメントのアクセシビリティ	v
4. 関連ドキュメント	v
5. 表記規則	v
1. SGD のインストール	1
1.1. インストールの準備	1
1.1.1. ISO イメージからの Linux パッケージリポジトリの作成	1
1.2. SGD のメインコンポーネントのインストール	2
1.2.1. SGD をインストールする方法	3
1.3. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールのインストール	4
1.3.1. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールする方法	5
1.4. UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのインストール	5
1.4.1. Solaris プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストールする方法	6
1.4.2. Linux プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストールする方法	6
1.4.3. Linux プラットフォームへの UNIX オーディオモジュールのインストールに関するトラブル シューティング	7
1.5. SGD Gateway のインストール	7
2. SGD のアップグレード	9
2.1. アップグレードを実行する前に	9
2.1.1. アップグレードと Early Access Program ソフトウェア	9
2.1.2. アップグレードのための条件	9
2.1.3. アップグレードとセキュアモードインストール	9
2.1.4. アップグレードと Client Access License	10
2.1.5. Oracle Solaris プラットフォーム上でアップグレードを実行する前に	10
2.1.6. アップグレードと既存の設定	10
2.1.7. アップグレードと UNIX オーディオ	11
2.2. アップグレードの実行	11
2.2.1. フルライセンスの単一サーバーアレイをアップグレードする方法	11
2.2.2. フルライセンスの複数サーバーアレイをアップグレードする方法	11
2.2.3. カスタマイズした SGD インストールのアップグレード	12
2.3. ほかの SGD コンポーネントのアップグレード	13
2.3.1. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法	13
2.3.2. UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法	14
2.3.3. SGD Client を自動的にアップグレードする方法	14
2.3.4. SGD Client を手動でアップグレードする方法	14
2.3.5. SGD Gateway をアップグレードする方法	14
3. SGD の概要	15
3.1. SGD へのログイン	15
3.1.1. SGD にログインする方法	15
3.2. Webtop の使用	18
3.2.1. アプリケーションの実行	18
3.2.2. 設定の変更	20
3.2.3. ログアウト	20
3.3. SGD 管理ツール	20
3.3.1. Administration Console	21
3.3.2. tarantella コマンド	23
3.4. ユーザーの作成	24
3.4.1. ユーザープロファイルおよび SGD 管理者の作成	24
3.5. Webtop へのアプリケーションの追加	29
3.5.1. アプリケーションオブジェクトを割り当てる方法	30
3.5.2. アプリケーションオブジェクトの作成および割り当て	35
3.6. SGD の管理	41
3.6.1. アレイ	43
3.6.2. ユーザーの監視	44
3.7. SGD の制御	45

3.7.1. SGD 拡張モジュールの制御	46
3.8. SGD ネットワークアーキテクチャー	47
3.8.1. クライアントデバイス	47
3.8.2. SGD サーバー	47
3.8.3. アプリケーションサーバー	47
3.9. 次の作業	48
3.9.1. ユーザーに通知する必要がある内容	48
3.9.2. 詳細ヘルプの入手場所	48
4. SGD の削除	49
4.1. SGD の削除	49
4.1.1. Oracle Solaris プラットフォーム上の SGD を削除する方法	49
4.1.2. Linux プラットフォーム上で SGD を削除する方法	49
4.1.3. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法	49
4.1.4. UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法	50
4.1.5. Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (手動インストール)	50
4.1.6. Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (自動インストール)	51
4.1.7. UNIX、Linux、および Mac OS X プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (手動インストール)	51
4.1.8. UNIX、Linux、および Mac OS X プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (自動インストール)	51

はじめに

『Oracle Secure Global Desktop インストールガイド (リリース 4.7 用)』では、Oracle Secure Global Desktop (SGD) のインストール、アップグレード、および削除の手順を説明します。また、このソフトウェアの使用を開始する方法も説明されています。

1. 対象ユーザー

このドキュメントは、SGD の新規ユーザーを対象にしています。Web 関連のテクノロジーに関する知識と、Windows および UNIX のプラットフォームに関する一般的な知識が必要となります。

2. ドキュメントの構成

このドキュメントは次のように構成されています。

- [1章 SGD のインストール](#)では、SGD をインストールする方法について説明します。
- [2章 SGD のアップグレード](#)では、以前のバージョンの SGD からアップグレードするための要件と手順について説明します。
- [3章 SGD の概要](#)では、SGD にログインしてソフトウェアの使用を開始する方法について説明します。
- [4章 SGD の削除](#)では、SGD を削除する方法について説明します。

3. ドキュメントのアクセシビリティ

アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについては、Oracle のアクセシビリティプログラムの Web サイト (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>) を参照してください。

Oracle Support へのアクセス

お客様は、My Oracle Support を通じてオンラインでのサポートをご利用いただけます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> (聴覚障害をお持ちの方は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>) を参照してください。

4. 関連ドキュメント

この製品のドキュメントは、次のサイトで入手できます。

<http://www.oracle.com/technetwork/jp/index.html/documentation/sgd-193668.html>

追加情報については、次のマニュアルを参照してください。

- Oracle Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)
- Oracle Secure Global Desktop ユーザーガイド (リリース 4.7 用)
- Oracle Secure Global Desktop Gateway 管理者ガイド (リリース 4.7 用)
- Oracle Secure Global Desktop のプラットフォームサポートおよびリリースノート (リリース 4.7 用)
- Oracle Secure Global Desktop Security Guide for Release 4.7

5. 表記規則

このドキュメントでは、次のような表記規則を使用しています。

表記規則	意味
ボールド体	ボールド体の個所は、アクションに関連するグラフィカルユーザーインターフェース要素、テキストや用語集で定義された用語などを表しています。

表記規則	意味
イタリック体	イタリック体の個所は、書名、強調語句、特定の値が指定されるプレースホルダ変数などを表しています。
モノスペース体	モノスペース体の個所は、パラグラフ内のコマンド、URL、例示されているコード、画面上に表示されるテキスト、ユーザーが入力するテキストなどを表しています。

第1章 SGD のインストール

この章では、オラクル Secure Global Desktop (SGD) をインストールする方法について説明します。

SGD には、インストール可能な複数のコンポーネントが含まれています。

- ホストにインストールされる SGD のメインコンポーネントは、SGD の主要機能を提供します。
- アプリケーションサーバーにインストールされるオプションコンポーネントは SGD 拡張モジュールと呼ばれ、SGD の追加機能を提供します。たとえば、ユーザーがクライアントデバイスのドライブにアクセスできるようにします。
- クライアントデバイスにインストールされるコンポーネントは、ユーザーが SGD サーバーに接続できるようにします。
- ホストにインストールされるオプションコンポーネントは SGD ゲートウェイと呼ばれ、プロキシサーバーと、SGD サーバーのアレイの負荷分散機能を提供します。

この章の内容は次のとおりです。

- 「インストールの準備」
- 「SGD のメインコンポーネントのインストール」
- 「Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールのインストール」
- 「UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのインストール」
- 「SGD Gateway のインストール」

1.1. インストールの準備

SGD をインストールする前に、<http://www.oracle.com/technetwork/jp/index.html/documentation/sgd-193668.html> にある『オラクル Secure Global Desktop のプラットフォームサポートおよびリリースノート (リリース 4.7 用)』を読んでください。リリースノートには次の内容が含まれています。

- ハードウェアの要件
- サポートされるプラットフォーム (必要なオペレーティングシステムの変更を含む)
- システムの要件 (必要なユーザーやネットワークポートなど)
- インストールに関する既知の問題

1.1.1. ISO イメージからの Linux パッケージリポジトリの作成

64 ビット Oracle Linux 6 プラットフォーム上にインストールするとき、[yum](#) コマンドを使用して、すべてのパッケージ依存関係が自動的に解決されるようにします。つまり、適切な Linux パッケージリポジトリを使用するように [yum](#) を構成する必要があるということを意味します。

Oracle Public Yum Server (<http://public-yum.oracle.com>) には、オンラインリポジトリを設定する方法についての手順が記載されています。

オンラインパッケージリポジトリが使用できない場合、使用しているオペレーティングシステム用のインストール ISO イメージをローカルパッケージリポジトリとして使用できます。

次のステップでは、SGD ホストに格納されている Oracle Linux ISO イメージからローカルパッケージリポジトリを作成する方法について説明します。

1. SGD ホスト上でスーパーユーザー (root) としてログインします。
2. リポジトリ用のディレクトリを作成し、ISO イメージをマウントします。次に例を示します。

```
# mkdir /iso
# mount -o loop OracleLinux-R6-version-Server-x86_64-dvd.iso /iso
```

3. 新しいリポジトリを使用するように `yum` を構成します。

`iso.repo` という名前の次の `yum` 構成ファイルを `/etc/yum.repos.d/` ディレクトリに作成します。

```
[iso]
name=iso
baseurl=file:///iso/
gpgkey=file:///iso/RPM-GPG-KEY
enabled=1
```

1.2. SGD のメインコンポーネントのインストール

Oracle Solaris プラットフォームでは、`pkgadd` コマンドを使用して SGD をインストールします。

64 ビットの Oracle Linux 6 プラットフォームでは、`yum` コマンドを使用して SGD をインストールします。パッケージ依存関係が自動的に解決されるようにするために、`yum` を構成して適切な Linux パッケージリポジトリを使用します。オンラインリポジトリが使用できない場合、「ISO イメージからの Linux パッケージリポジトリの作成」を参照してください。

サポートされるその他の Linux プラットフォームでは、`rpm` コマンドを使用して SGD をインストールします。

デフォルトでは、SGD は `/opt/tarantella` ディレクトリにインストールされます。インストールディレクトリは、次のようにして変更できます。

- Oracle Solaris プラットフォーム – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。
- Oracle Solaris Trusted Extensions プラットフォーム – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。`/opt` ディレクトリは読み取り専用ディレクトリであるため、別のインストールディレクトリを選択する必要があります。また、ラベル付けされたゾーンに SGD をインストールする必要があります。大域ゾーンには SGD をインストールしないでください。
- Linux プラットフォーム – 32 ビット Linux プラットフォームでは、ソフトウェアのインストール時に `rpm` コマンドに `--prefix` オプションを使用することで、別のインストールディレクトリを選択できます。

SGD のメインコンポーネントをインストールする際に、SGD Web サーバーをインストールします。SGD インストールプログラムでは、SGD Web サーバーが HTTP 接続を待機する TCP ポートを指定する画面が表示されます。通常、これは TCP ポート 80 です。別のプロセスがこのポート上で待機している場合には、別のポートを選択するように求められます。

SGD を次の方法でインストールできます。

- セキュアモード。これはデフォルトのインストールモードです。インストールプログラムは次のことを行います。
 - SSL (Secure Sockets Layer) 証明書をインストールし、クライアントデバイスと SGD サーバーの間で SGD サーバーのセキュア接続を構成します。

インストール中に証明書の詳細を指定しない場合、自己署名付き SSL 証明書が自動的に作成されてインストールされます。自己署名付き SSL 証明書は、テスト目的でのみ使用してください。
- SGD サーバーのアレイ内でのセキュア通信を有効にします。つまり、アレイ内での SGD サーバー間の接続はセキュリティー保護されることを意味します。



ヒント

セキュアモードでインストールするとき、インストールプログラムは `tarantella security enable` コマンドを使用して、セキュア接続を自動的に構成および有効化します。このコマンドを使用して SSL 証明書をインストールし、セキュア接続を有効にすることの詳細については、『Oracle Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』を参照してください。

- 非セキュアモード。SGD サーバーは、インストール中にセキュア接続用に構成されません。『Oracle Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』に記載されているように、インストール後に接続をセキュリティー保護することができます。

SGD をインストールすると、SGD サーバーと SGD Web サーバーが稼働します。

1.2.1. SGD をインストールする方法

作業を開始する前に、セキュアモードでインストールする場合は、SSL 証明書と、必要に応じて非公開鍵および CA 証明書にアクセスできることを確認してください。証明書は PEM 形式で作成されている必要があります。

1. ソフトウェアを入手します。

ソフトウェアを <http://www.oracle.com> からダウンロードするか、インストールメディアからコピーします。

ホスト上の一時ディレクトリにソフトウェアを保存します。

パッケージファイルは次のとおりです。

- [tta-version.sol-x86.pkg](#) (x86 プラットフォーム版 Oracle Solaris の場合)
- [tta-version.sol-sparc.pkg](#) (SPARC テクノロジプラットフォーム版 Oracle Solaris の場合)
- [tta-version.i386.rpm](#) (Linux プラットフォームの場合)

2. ホストにスーパーユーザー (root) としてログインします。

3. SGD をインストールします。

パッケージファイルが圧縮されている場合、インストール前にファイルを解凍する必要があります。

x86 プラットフォーム版 Oracle Solaris にインストールする場合:

```
# pkgadd -d /tempdir/tta-version.sol-x86.pkg
```

SPARC テクノロジプラットフォーム版 Oracle Solaris にインストールする場合:

```
# pkgadd -d /tempdir/tta-version.sol-sparc.pkg
```



注記

Oracle Solaris プラットフォームでは、`pwd: cannot determine current directory!` というエラーメッセージが表示されてインストールが失敗した場合は、`/tempdir` ディレクトリに移動して、インストールを再度実行してください。

64 ビット Oracle Linux 6 プラットフォームにインストールする場合:

```
# yum install /tempdir/tta-version.i386.rpm
```

サポートされるその他の Linux プラットフォームにインストールする場合:

```
# rpm -Uvh /tempdir/tta-version.i386.rpm
```

4. SGD パッケージがパッケージデータベースに登録されていることを確認します。

Oracle Solaris プラットフォームの場合:

```
# pkginfo -x tta
```

Linux プラットフォームの場合:

```
# rpm -q tta
```

5. SGD サーバーを起動します。

```
# /opt/tarantella/bin/tarantella start
```

SGD サーバーの初回起動時には、SGD インストールプログラムが実行されます。このプログラムは次のことを行います。

- ソフトウェアライセンス契約書への同意をユーザーに求めます。
- 推奨される設定の一覧を提示します。ユーザーは、それを受け入れることも変更することもできます。次の設定があります。
- セキュアモードでインストールするか?デフォルトでは、SGD は SGD サーバーへのセキュア接続と、アレイ内のセキュア通信を使用するようにインストールおよび構成されます。反対に、セキュア接続なしで SGD をインストールすることもできます。
- 証明書ファイル名。SGD サーバーへの接続をセキュリティー保護するために使用する SSL 証明書。独自の SSL 証明書を持っている場合、証明書ファイルへのパスを入力します。このパスは、[ttasys](#) ユーザーから読み取り可能である必要があります。

デフォルト設定の * は、自己署名付き証明書が自動的にインストールされることを意味します。

- 非公開鍵ファイル名。独自の SSL 証明書を使用する場合、非公開鍵ファイルへのフルパスを入力します。このパスは、[ttasys](#) ユーザーから読み取り可能である必要があります。
 - (オプション) ルート証明書ファイル名。独自の SSL 証明書を使用する場合、ルート CA 証明書ファイルへのフルパスを入力します。このパスは、[ttasys](#) ユーザーから読み取り可能である必要があります。
- この設定が必要なのは、SSL 証明書が、サポートされていない CA か、中間 CA によって署名されている場合に限られます。
- ピア DNS 名。完全修飾ドメイン名システム (DNS) 名を使用する必要があります。ファイアウォールを備えたネットワークで SGD を実行する場合は、ファイアウォールの内側でホストが認識されている DNS 名を使用します。
 - TCP ポート。TCP ポート 80 で現在別のプロセスが実行されている場合は、SGD インストールプログラムによって SGD Web サーバーに使用する TCP ポートの指定が求められます。
 - ログを毎週アーカイブするか?デフォルトでは、SGD は毎週日曜日の午前 3 時にログファイルのアーカイブを作成します。ログファイルのアーカイブは、[/opt/tarantella/var/log](#) ディレクトリに作成されます。
 - ソフトウェアをインストールおよび設定します。これには、いくつかのサンプルアプリケーションで使用する組織階層の作成、および UNIX システムまたは Linux システムの [root](#) ユーザーを SGD 管理者にする処理が含まれます。
 - (オプション) SSL 証明書をインストールします。セキュアモードでのインストールの場合、この証明書は、SGD サーバーをセキュア接続用に構成するために使用されます。
 - システム起動ディレクトリにファイルを追加して、システムの再起動時に SGD サーバーおよび SGD Web サーバーが確実に起動します。たとえば、ソフトウェアを実行レベル 3 でインストールする場合、このファイルは [/etc/rc3.d](#) ディレクトリに置かれ、ファイル名は [*sun.com-sgd-base](#) になります。
 - root の [crontab](#) を変更して、SGD ログファイルを毎週アーカイブします。
 - Linux プラットフォームの場合のみ、SGD PAM (Pluggable Authentication Module) 構成ファイル [/etc/pam.d/tarantella](#) を追加します。これは、既存の [/etc/pam.d/passwd](#) ファイルからコピーされます。このファイルが存在しない場合、PAM 構成ファイルは作成されません。
 - ログファイル [/tmp/tta_inst.log](#) を作成します。このファイルには、インストール中に表示されたメッセージのコピーが格納されます。

1.3. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールのインストール

Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールには、高度な負荷分散およびシームレスウィンドウ用のモジュールが含まれます。拡張モジュールをインストールする際、これらのモジュールのどれをインストールするかを選択できません。

デフォルトでは、拡張モジュールは `C:\Program Files\Oracle\Secure Global Desktop Enhancement Module` ディレクトリにインストールされますが、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。

インストール後、負荷分散サービスが稼働します。負荷分散サービスは、Windows サービスツールでは「Secure Global Desktop 負荷分散サービス」として一覧表示されます。

負荷分散サービスは、Windows ホストがリブートされるたびに自動的に開始されます。

1.3.1. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールする方法

1. 管理者特権を持つユーザーで Windows ホストにログインします。
2. ホスト上の一時ディレクトリに、拡張モジュールインストールプログラムを保存します。

インストールメディアからインストールする場合、インストールプログラムは `modules` ディレクトリにあります。

または、インストールプログラムを SGD Web サーバー (<https://server.example.com>) からダウンロードします。ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。SGD Web サーバーの開始画面が表示されたら、「Oracle Secure Global Desktop 拡張モジュールのインストール」をクリックします。

SGD 拡張モジュールインストールプログラムは `temwin32.msi` です。

3. SGD 拡張モジュールをインストールします。

`temwin32.msi` をダブルクリックし、画面に表示される指示に従います。

1.4. UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのインストール

UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールには、高度な負荷分散、CDM、および UNIX オーディオ用のモジュールが含まれます。

拡張モジュールの UNIX オーディオモジュールはオプションであり、デフォルトではインストールされません。UNIX オーディオモジュールのインストールを選択する場合は、SGD オーディオドライバがオペレーティングシステムのカーネルにインストールされます。

Oracle Solaris プラットフォームの場合、UNIX オーディオモジュールは大域ゾーンにのみインストールできます。

Linux プラットフォームの場合、SGD オーディオドライバはカーネルにインストールされる前にコンパイルされます。オーディオドライバをコンパイルするために、ホストで次のものが使用可能になっている必要があります。

- 使用している Linux カーネルのバージョンに対応するヘッダーファイル
- GNU コンパイラコレクション (GCC)
- `make` ユーティリティ
- `soundcore` カーネルモジュール

Oracle Solaris プラットフォームの場合は、`pkgadd` コマンドを使用して拡張モジュールをインストールします。

Linux プラットフォームの場合は、`rpm` コマンドを使用して拡張モジュールをインストールします。

デフォルトでは、拡張モジュールは `/opt/ita_tem` ディレクトリにインストールされます。インストールディレクトリは、次のようにして変更できます。

- Oracle Solaris プラットフォーム – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。
- Oracle Solaris Trusted Extensions プラットフォーム – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。`/opt` ディレクトリは読み取り専用ディレクトリである

ため、別のインストールディレクトリを選択する必要があります。また、ラベル付けされたゾーンに拡張モジュールをインストールする必要があります。大域ゾーンには拡張モジュールをインストールしないでください。

- Linux プラットフォーム – ソフトウェアのインストール時に `rpm` コマンドに `--prefix` オプションを使用することで、別のインストールディレクトリを選択できます。

インストール後、高度な負荷分散モジュールおよび UNIX オーディオモジュール (選択した場合) が稼働します。CDM モジュールは追加の構成を必要とするため、稼働しません。必要な追加の構成については、『Oracle Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』を参照してください。

拡張モジュールインストールプログラムは、システム起動ディレクトリにファイルを追加して、システムのリブート時に拡張モジュールが確実に起動するようにします。たとえば、ソフトウェアを実行レベル 3 でインストールする場合、このファイルは `/etc/rc3.d` ディレクトリに置かれ、ファイル名は `*sun.com-sgd-em` になります。

1.4.1. Solaris プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストールする方法

1. ホスト上の一時ディレクトリに SGD 拡張モジュールを保存します。

インストールメディアからインストールする場合、パッケージは `modules` ディレクトリにあります。

または、インストールプログラムを SGD Web サーバー (<https://server.example.com>) からダウンロードします。ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。SGD Web サーバーの開始画面が表示されたら、「Oracle Secure Global Desktop 拡張モジュールのインストール」をクリックします。

パッケージファイルは次のとおりです。

- `tem-version.sol-x86.pkg` (x86 プラットフォーム版 Solaris OS の場合)
- `tem-version.sol-sparc.pkg` (SPARC テクノロジプラットフォーム版 Oracle Solaris の場合)

ここで、`version` は SGD のバージョン番号です。

2. ホストにスーパーユーザー (root) としてログインします。

3. SGD 拡張モジュールをインストールします。

パッケージファイルが圧縮されている場合、インストール前にファイルを解凍する必要があります。

x86 プラットフォーム版 Oracle Solaris にインストールする場合:

```
# pkgadd -d /tmpdir/tem-version.sol-x86.pkg
```

SPARC テクノロジプラットフォーム版 Oracle Solaris にインストールする場合:

```
# pkgadd -d /tmpdir/tem-version.sol-sparc.pkg
```

インストール時に、拡張モジュールインストールプログラムは次の設定を提示します。ユーザーは、それを受け入れることも変更することもできます。

- インストールディレクトリ。
- ホストが持っている仮想メモリーの容量。これは負荷分散に使用されます。
- UNIX オーディオモジュールをインストールするかどうか。

4. 拡張モジュールパッケージがパッケージデータベースに登録されていることを確認します。

```
# pkginfo -x tem
```

1.4.2. Linux プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストールする方法

1. ホスト上の一時ディレクトリに SGD 拡張モジュールを保存します。

インストールメディアからインストールする場合、パッケージは `modules` ディレクトリにあります。

または、インストールプログラムを SGD Web サーバー (<https://server.example.com>) からダウンロードします。ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。SGD Web サーバーの開始画面が表示されたら、「Oracle Secure Global Desktop 拡張モジュールのインストール」をクリックします。

パッケージファイルは `tem-version.i386.rpm` です。ここで、`version` は SGD のバージョン番号です。

2. ホストにスーパーユーザー (root) としてログインします。
3. SGD 拡張モジュールをインストールします。

```
# rpm -Uvh tem-version.i386.rpm
```

4. 拡張モジュールパッケージがパッケージデータベースに登録されていることを確認します。

```
# rpm -q tem
```

5. 拡張モジュールインストールプログラムを起動します。

```
# /opt/tta_tem/bin/tem start
```

6. 拡張モジュールの設定を構成します。

拡張モジュールインストールプログラムは次の設定を提示します。ユーザーは、それを受け入れることも変更することもできます。

- ホストが持っている仮想メモリーの容量。これは負荷分散に使用されます。
- UNIX オーディオモジュールをインストールするかどうか。

1.4.3. Linux プラットフォームへの UNIX オーディオモジュールのインストールに関するトラブルシューティング

Linux プラットフォームでは、UNIX オーディオモジュールがインストールされない場合、SGD 拡張モジュールインストールプログラムはユーザーにインストールを取り消すか、UNIX オーディオモジュールをインストールせずにインストールを続行するかを尋ねます。UNIX オーディオモジュールがインストールされない場合は、次のことを確認してください。

- 使用している Linux カーネルのバージョンに対応するヘッダーファイルがインストールされているかどうか。
- ヘッダーファイルと Linux カーネルのバージョン番号が一致しているかどうか。
- GCC のバージョンが、Linux カーネルのコンパイルに使用されたバージョンと一致しているかどうか。
- `dmesg` ユーティリティでほかのエラーが表示されるかどうか。
- 使用している環境で `ARCH` 環境変数が設定されている場合、システムに存在するディレクトリのパスがそれに含まれるかどうか。

1.5. SGD Gateway のインストール

SGD Gateway のインストールと構成の手順については、<http://www.oracle.com/technetwork/jp/index.html/documentation/sgd-193668.html> で参照可能な『Oracle Secure Global Desktop Gateway 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』で説明されています。

第2章 SGD のアップグレード

この章では、以前のバージョンの オラクル Secure Global Desktop (SGD) からアップグレードする要件および手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 「アップグレードを実行する前に」
- 「アップグレードの実行」
- 「ほかの SGD コンポーネントのアップグレード」

2.1. アップグレードを実行する前に

このセクションでは、アップグレードを実行する前に必要となる知識と作業について説明します。

2.1.1. アップグレードと Early Access Program ソフトウェア

SGD の Early Access Program (EAP) ソフトウェアリリースへのアップグレード、および EAP ソフトウェアリリースからのアップグレードはサポートされていません。EAP ソフトウェアリリースは、常に新規インストールを実行する必要があります。

2.1.2. アップグレードのための条件

このバージョンの SGD へのサポートされているアップグレードパスは、<http://www.oracle.com/technetwork/jp/index.html/documentation/sgd-193668.html> で参照可能な『オラクル Secure Global Desktop のプラットフォームサポートおよびリリースノート (リリース 4.7 用)』に一覧表示されています。

別のバージョンの SGD からアップグレードする場合は、Oracle サポートまでお問い合わせください。

サポートされていないアップグレードを実行する場合は、新しいバージョンのソフトウェアをインストールする前に、空ファイル `/opt/tarantella/var/UPGRADE` を作成する必要があります。SGD インストールは正しくアップグレードされない場合があります。

2.1.3. アップグレードとセキュアモードインストール

SGD リリース 4.7 から、SGD はデフォルトでセキュアモードでインストールされます。セキュアモードインストールでは、SSL 証明書が SGD サーバーにインストールされます。SSL 証明書は、インストール中に生成される自己署名付き証明書とするか、独自の証明書を使用することもできます。

アップグレードの作業は、以前のバージョンの SGD でセキュア接続が使用されていたかどうかによって異なり、次のようになります。

- アップグレード前のインストール環境がセキュリティー保護されていない場合、アップグレードはデフォルトでセキュアモードインストールとなります。これは SGD のクリーンインストールと同じです。
- アップグレード前のインストール環境がセキュリティー保護されていて、自己署名付き証明書を使用している場合、アップグレードはデフォルトでセキュアモードインストールとなり、新しい自己署名付き証明書をインストールします。



注記

SGD サーバーと一緒に SGD Gateway を使用している場合、Gateway に新しい証明書をインストールすることによって Gateway 配備を再構成する必要があります。SSL 証明書を Gateway にインストールする方法の詳細は、『オラクル Secure Global Desktop Gateway 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』を参照してください。

- アップグレード前のインストール環境がセキュリティー保護されていて、ユーザーが提供した証明書を使用している場合、アップグレードはデフォルトで、同じ証明書を使用したセキュアモードインストールとなります。

2.1.4. アップグレードと Client Access License

SGD リリース 4.7 からは、Windows 以外のクライアントデバイス向けの Client Access License (CAL) は SGD サーバー上のライセンスプールに保管されなくなりました。CAL はクライアントデバイス上の場所に保管されます。

SGD 4.7 へのアップグレード以降では、Windows 以外のクライアントデバイスは、リモートデスクトップセッションホストによって発行された一時的な CAL を使用できます。一時的な CAL は、適切な CAL がクライアントデバイスに格納されるまで使用できます。

2.1.5. Oracle Solaris プラットフォーム上でアップグレードを実行する前に

Oracle Solaris プラットフォームでアップグレードを実行する場合、`pkgadd` コマンドはパッケージをインストールする前にいくつかのチェックを行い、ユーザーに変更についての確認を求めます。`pkgadd` に指示を与える管理ファイルを作成して、これらのチェックを省略し、ユーザーに確認せずにパッケージをインストールすることもできます。

ユーザーの対話的操作を回避するには、管理ファイルに次の行を含める必要があります。

```
conflict=nocheck
instance=unique
```

SGD をアップグレードする際に、`pkgadd -a adminfile` コマンドを使用して管理ファイルを指定します。

アップグレードを実行する際に管理ファイルを指定しないと、SGD インストールプログラムによって管理ファイルが作成されます。また、`pkgadd` コマンドを `-a adminfile` オプション付きで再度実行できるように、インストールを終了するオプションが提供されます。

2.1.6. アップグレードと既存の設定

アップグレードを実行すると、既存の設定に次の変更が適用されます。

- 既存のローカルリポジトリ (旧称 ENS (Enterprise Naming Scheme) データストア) は、保持されてバックアップされます。

ローカルリポジトリは SGD 組織階層のすべてのオブジェクトの記憶領域です。

`/opt/tarantella/var/ens` ディレクトリが `/opt/tarantella/var/ens.oldversion` ディレクトリにバックアップされます。

このバックアップは変更されません。既存の ENS データベースが変更される可能性があるのは、それを新しいバージョンの SGD で動作できるようにするためにいくつかの変更が必要となる場合です。

- SGD サーバー構成と SGD グローバル構成が保持されますが、バックアップはされません。

この構成は、`/opt/tarantella/var/serverconfig` ディレクトリに格納されています。

この構成が変更されるのは、新しいプロパティファイルを追加したり、既存のプロパティに新しい属性を追加したりする必要がある場合だけです。

- `/opt/tarantella/var/serverresources` ディレクトリ内のすべてのサーバーリソースファイルが置換されます。

これらのファイルは SGD の動作を制御するので、通常は編集されません。

- SGD ログインスクリプトが保持され、バックアップされます。

`/opt/tarantella/var/serverresources/expect` ディレクトリが `/opt/tarantella/var/serverresources/expect.oldversion` ディレクトリにバックアップされます。

- カスタマイズ済み SGD ファイルがバックアップされますが、アップグレードはされません。

標準インストールに含まれるファイル (Webtop テーマなど) を変更するか、ユーザー独自のファイル (ログインスクリプトなど) を追加する方法で、SGD をカスタマイズすることができます。

これらのファイルは手動でアップグレードする必要があります。

SGD の新しいバージョンのインストール時に、手動アップグレードが必要な可能性のあるファイルが存在する場合、インストールプログラムにより警告が表示されます。これらのファイルをアップグレードする方法については、「[カスタマイズした SGD インストールのアップグレード](#)」を参照してください。

2.1.7. アップグレードと UNIX オーディオ

アップグレードに従って、X アプリケーションのオーディオを使用する場合は、UNIX または Linux プラットフォームアプリケーションサーバー上の SGD 拡張モジュールもアップグレードする必要があります。アップグレードの手順については、「[UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法](#)」を参照してください。

SGD と SGD 拡張モジュールのバージョンが異なる場合は、UNIX オーディオサービスが正しく動作しないことがあります。

2.2. アップグレードの実行

SGD のアップグレード方法は、単一サーバーアレイをアップグレードするのか複数サーバーアレイをアップグレードするのによって異なります。SGD をカスタマイズした場合は、カスタマイズしたファイルの手動アップグレードが必要になることもあります。

2.2.1. フルライセンスの単一サーバーアレイをアップグレードする方法

1. 中断中のセッションも含めて、アレイ内で実行中のユーザーセッションやアプリケーションセッションがないことを確認します。
2. 新しいバージョンの SGD をインストールしてサーバーをアップグレードします。

2.2.2. フルライセンスの複数サーバーアレイをアップグレードする方法

複数サーバーアレイ内のすべての SGD サーバーは、同じバージョンの SGD ソフトウェア上で実行する必要があります。このため、アレイをアップグレードする場合は、アレイを解除してサーバーを個別にアップグレードしてから、アレイを再構築する必要があります。

1. 中断中のセッションも含めて、アレイ内で実行中のユーザーセッションやアプリケーションセッションがないことを確認します。
2. アレイを解除します。

プライマリ SGD サーバー上で次のコマンドを実行して、セカンダリ SGD サーバーをアレイから切り離します。

```
# tarantella array detach --secondary server
```

セカンダリ SGD サーバーは、一度に 1 つずつ切り離してください。アレイの構造に変更を加えた場合は、SGD によって、その変更がアレイ内のすべての SGD サーバーにコピーされるのを待ってから、次の変更を行うようにしてください。プライマリ SGD サーバーで `tarantella status` コマンドを実行して、アレイのステータスを確認してください。

3. 新しいバージョンのソフトウェアをインストールしてプライマリ SGD サーバーをアップグレードします。
4. 新しいバージョンのソフトウェアをインストールしてセカンダリ SGD サーバーをアップグレードします。
5. アレイを再構築します。

すべての SGD サーバー上のクロックは同期している必要があります。時間差が 1 分を超えている場合、アレイの連結操作は失敗します。

プライマリ SGD サーバー上で次のコマンドを実行して、セカンダリ SGD サーバーをアレイに追加します。

```
# tarantella array join --secondary server
```

セカンダリ SGD サーバーは、一度に 1 つずつ追加してください。アレイの構造に変更を加えた場合は、SGD によって、その変更がアレイ内のすべての SGD サーバーにコピーされるのを待ってから、次の変更を行うようにし

てください。プライマリ SGD サーバーで `tarantella status` コマンドを実行して、アレイのステータスを確認してください。

セカンダリ SGD サーバーはアレイに追加されると、プライマリ SGD サーバーにインストールされているすべてのライセンスキーを取得します。

2.2.3. カスタマイズした SGD インストールのアップグレード

アップグレード時に、SGD インストールプログラムは検出したカスタマイズ済みファイルを保持しますが、それらのアップグレードは行いません。これらのファイルは手動でアップグレードする必要があります。アップグレードが必要な可能性があるのは、次の 2 セットのファイルです。

- SGD Web サーバファイル – Web アプリケーションファイル、および SGD Web サーバーを構成するために使用されるファイル
- SGD サーバファイル – SGD サーバーで使用するファイル (ログインスクリプトなど)

アップグレードの完了後に、次の 2 種類のカスタマイズされたファイルに注意を払う必要があります。

- カスタマイズ済みファイル – 標準の SGD インストールに含まれるファイルのうち、SGD 管理者により変更されたもの
- ビスボークファイル – ユーザーの組織が作成し、SGD インストールに追加したファイル

2.2.3.1. カスタマイズ済み SGD Web サーバファイルのアップグレード

アップグレード時に、SGD インストールプログラムは、検出したすべてのカスタマイズ済み SGD Web サーバファイルをバックアップします。バックアップされたファイルとその場所のリストは、`/opt/tarantella/var/log/webservercustomized.list` ログファイルに記録されます。

カスタマイズ済みファイルをアップグレードするには、`diff` や `patch` などのユーティリティを使用して、バックアップされたファイルと標準の SGD インストールに含まれるファイルを比較し、相違点をマージします。

SGD インストールプログラムは、検出したすべてのビスボーク SGD Web サーバファイルを新しいインストールにコピーします。これらのファイルは変更されません。

2.2.3.2. カスタマイズ済み SGD サーバファイルのアップグレード

アップグレード時に、SGD インストールプログラムは、検出したカスタマイズ済み SGD サーバファイルおよびビスボーク SGD サーバファイルをバックアップし、次のログファイルを生成します。

- `/opt/tarantella/var/log/upgraded.files` – 変更内容のサマリー
- `/opt/tarantella/var/log/customized.list` – 管理者が編集または追加したファイルのリスト
- `/opt/tarantella/var/log/customizedchanged.list` – アップグレードによって変更され、管理者が編集したファイルのリスト
- `/opt/tarantella/var/log/docrootjava.log` – 元のインストールに新規追加されたが、元のインストールから変更された Java テクノロジファイルのリスト

これらのログファイルを使用して、手動でアップグレードする必要があるファイルを特定します。

カスタマイズ済み SGD サーバファイルを手動でアップグレードする方法

1. カスタマイズ済みファイルのコピーを作成します。
2. SGD のバージョン間での変更内容を特定します。

`customizedchanged.list` ログファイルには、手動でアップグレードする必要がある、カスタマイズ済みファイルのリストが含まれています。このログファイルにリスト出力されるファイルごとに、システムには次の 3 つのバージョンが保持されています。

- 古いカスタマイズ済みのバージョン。次のディレクトリのいずれかに格納されています。
 - `/opt/tarantella/var/serverresources.oldversion` - ログインスクリプト用。
 - `/opt/tarantella/etc/data.oldversion` - カラーマップなどその他のファイル用。
 - `/opt/tarantella/etc/templates.oldversion` ディレクトリ内にある、古いカスタマイズされていないバージョン。
 - `/opt/tarantella/etc/templates` ディレクトリ内にある、新しいカスタマイズされていないバージョン。

`diff` などのユーティリティーを使用して、カスタマイズされていない古いファイルを、カスタマイズされていない新しいファイルと比較します。これで、SGD のバージョン間での変更内容がわかります。

- 変更内容をカスタマイズ済みファイルに適用します。

`patch` などのユーティリティーを使用して、前の手順で特定した変更内容をカスタマイズ済みファイルのコピーに適用します。

- アップグレードしたカスタマイズ済みファイルを、新しい SGD インストールの正しい場所にコピーします。

ビスポーク SGD サーバファイルを手動でアップグレードする方法

- ビスポークファイルのコピーを作成します。
- SGD のバージョン間での変更内容を特定します。

`docrootjava.log` および `customized.list` ログファイルには、手動アップグレードが必要な可能性のあるビスポークファイルのリストが含まれています。

ビスポークファイルをアップグレードする唯一の方法は、標準 SGD ファイルをバージョン間で比較して変更内容を特定し、それらの変更をビスポークファイルに適用することです。

`diff` などのユーティリティーを使用して、カスタマイズされていない古いファイルを、カスタマイズされていない新しいファイルと比較します。これで、SGD のバージョン間での変更内容がわかります。

変更内容を特定するには、次のファイルを比較します。

- `/opt/tarantella/etc/templates.oldversion` ディレクトリ内にある、旧バージョンの標準 SGD ファイル。
- `/opt/tarantella/etc/templates` ディレクトリ内にある、新バージョンの標準 SGD ファイル。

- 変更内容をビスポークファイルに適用します。

`patch` などのユーティリティーを使用して、手順 2 で特定した変更内容をビスポークファイルのコピーに適用します。

- アップグレードしたビスポークファイルを、新しい SGD インストールの正しい場所にコピーします。

2.3. ほかの SGD コンポーネントのアップグレード

このセクションでは、SGD 拡張モジュール、SGD Client、および SGD Gateway のアップグレード方法について説明します。

2.3.1. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法

- (オプション) SGD 拡張モジュールの現在のバージョンがバージョン 4.7 より前の場合、現在のバージョンを手動で削除します。



注意

現在のバージョンを手動で削除しない場合、アップグレードプロセスは失敗します。

「Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法」を参照してください。

2. 新しいバージョンの拡張モジュールをインストールします。

「Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールする方法」を参照してください。

2.3.2. UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法

SGD 拡張モジュールをアップグレードして、UNIX オーディオモジュールをインストールすると、UNIX オーディオモジュールがすでに実行中であることを示すメッセージが表示されることがあります。このメッセージが表示されるのは、SGD オーディオドライバが現在使用中であり、停止することができないからです。アップグレードされた SGD オーディオドライバは、次回ホストを再起動したときにロードされます。

1. 新しいバージョンの拡張モジュールをインストールします。

「UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのインストール」を参照してください。

2.3.3. SGD Client を自動的にアップグレードする方法

SGD Client を自動的にアップグレードできるのは、次の条件を両方満たしている場合だけです。

- 以前のバージョンの SGD Client が自動的にインストールされました
- ユーザーのブラウザに、サポートされている Java プラグインソフトウェアがあり、Java テクノロジが有効になっています

1. 既存のブラウザセッションをすべて終了します。
2. 新しいブラウザセッションを開始します。
3. SGD にログインします。

「SGD にログインする方法」を参照してください。

2.3.4. SGD Client を手動でアップグレードする方法

以前のバージョンの SGD Client を手動でインストールした場合のみ、ここで説明する手順に従ってください。

1. 新しいバージョンの SGD Client をインストールします。

2.3.5. SGD Gateway をアップグレードする方法

1. 新しいバージョンの SGD Gateway をインストールします。

SGD Gateway のインストールと構成の手順については、<http://www.oracle.com/technetwork/jp/index.html/documentation/sgd-193668.html> で参照可能な『オラクル Secure Global Desktop Gateway 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』で説明されています。

第3章 SGD の概要

この章では、オラクル Secure Global Desktop (SGD) にログインし、ソフトウェアの使用を開始する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 「SGD へのログイン」
- 「Webtop の使用」
- 「SGD 管理ツール」
- 「ユーザーの作成」
- 「Webtop へのアプリケーションの追加」
- 「SGD の管理」
- 「SGD の制御」
- 「SGD ネットワークアーキテクチャー」
- 「次の作業」

3.1. SGD へのログイン

SGD では、ユーザー認証用の複数のメカニズムがサポートされます。デフォルトでは、SGD ホスト上にアカウントを保持するすべてのユーザーが、UNIX または Linux システムのユーザー名とパスワードを使って SGD にログインできます。

3.1.1. SGD にログインする方法

SGD を使用するには、SGD Client と、サポートされているブラウザが必要です。通常、SGD Client は、ログイン時に自動的にインストールされます。自動インストールを実行するには、ブラウザに、サポートされている Java プラグインソフトウェアがあり、Java テクノロジが有効になっている必要があります。

使用しているブラウザが Java テクノロジに対応していない場合は、SGD Client を手動でインストールしてから SGD に接続する必要があります。

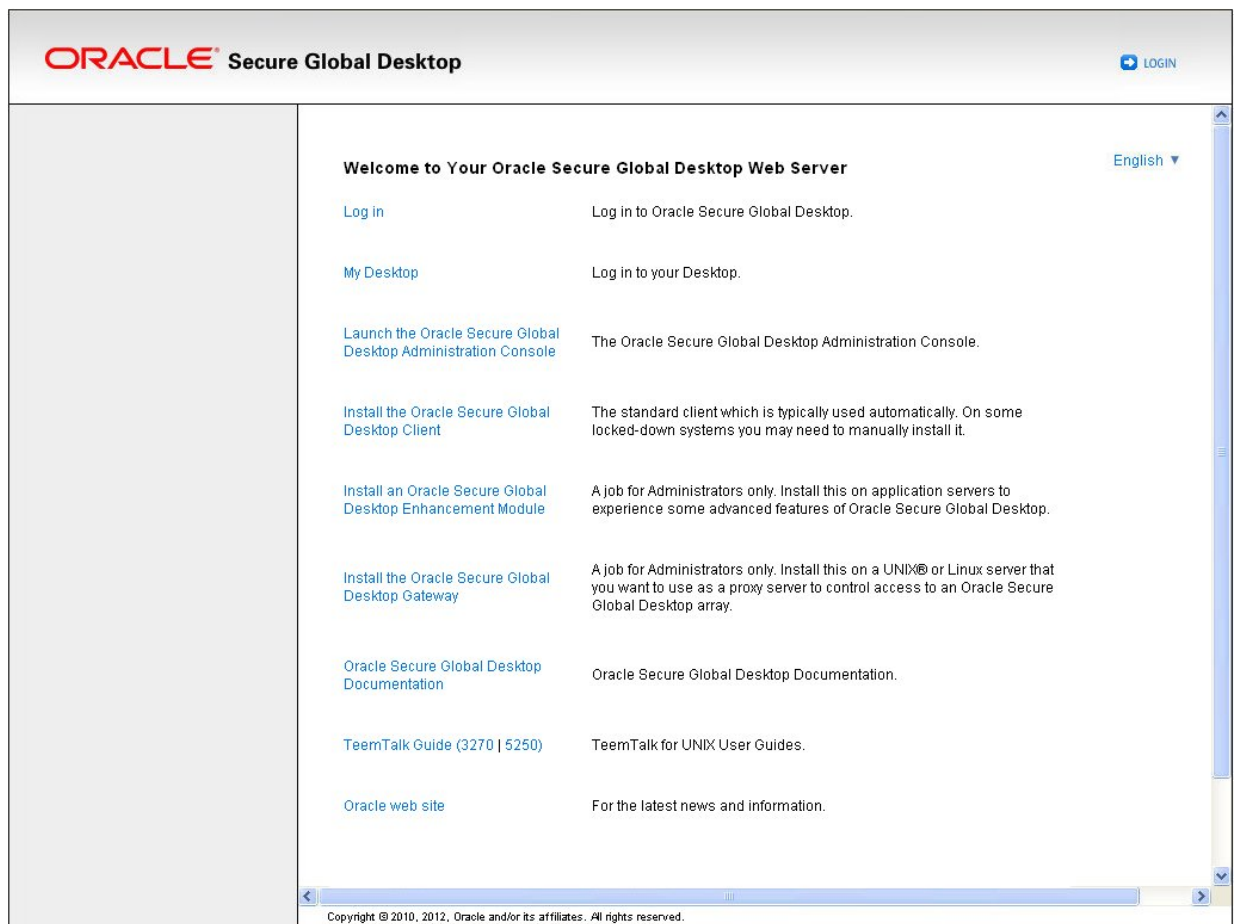
ブラウザで SGD を使用するには、JavaScript プログラミング言語を有効にする必要があります。

SGD サーバーが、サポートされない認証局 (CA) によって署名された SSL (Secure Sockets Layer) 証明書を使用している場合、ユーザーが SGD にログインするときにセキュリティ警告が表示されることがあります。セキュリティ警告およびこれを回避する方法については、『オラクル Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』を参照してください。

1. ブラウザを使用して、<https://server.example.com> に移動します。ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。

図3.1 「SGD Web サーバーの開始画面」 に示すように、SGD Web サーバーの開始画面が表示されます。

図3.1 SGD Web サーバーの開始画面



2. (オプション) 使用する言語を選択します。

開始画面の上部付近にあるリストから言語を選択します。

開始画面が選択した言語で表示されます。

3. 「ログイン」をクリックします。

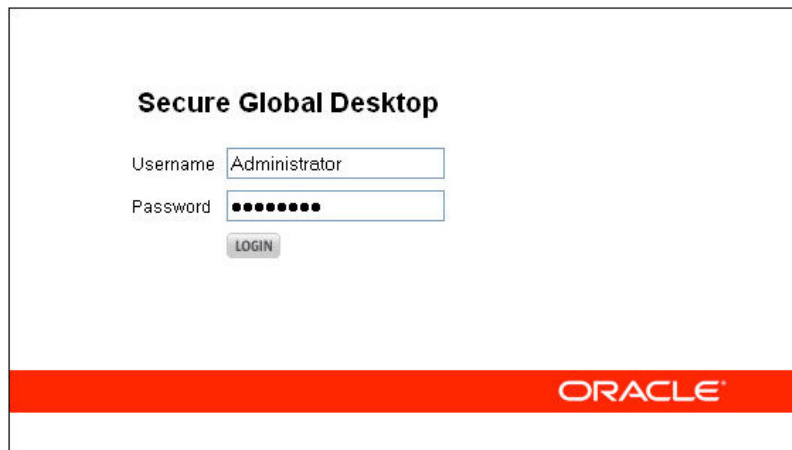
図3.2「SGD のログインページ」に示すように、SGD のログインページが表示されます。

4. ログインします。

SGD のインストール時に、SGD によって、「Administrator」というユーザー名を持つデフォルトの SGD 管理者が作成されます。このユーザーは、そのホスト上の UNIX または Linux システムの root ユーザーのパスワードを使って認証されます。

「ユーザー名」には Administrator と入力し、「パスワード」にはスーパーユーザー (root) パスワードを入力します。

図3.2 SGD のログインページ



Java テクノロジのセキュリティーメッセージが表示された場合は、「実行」をクリックして SGD Client をインストールします。

「信頼されない初期接続」メッセージが表示されます。図3.3 「「信頼されない初期接続」メッセージ」を参照してください。

図3.3 「信頼されない初期接続」メッセージ



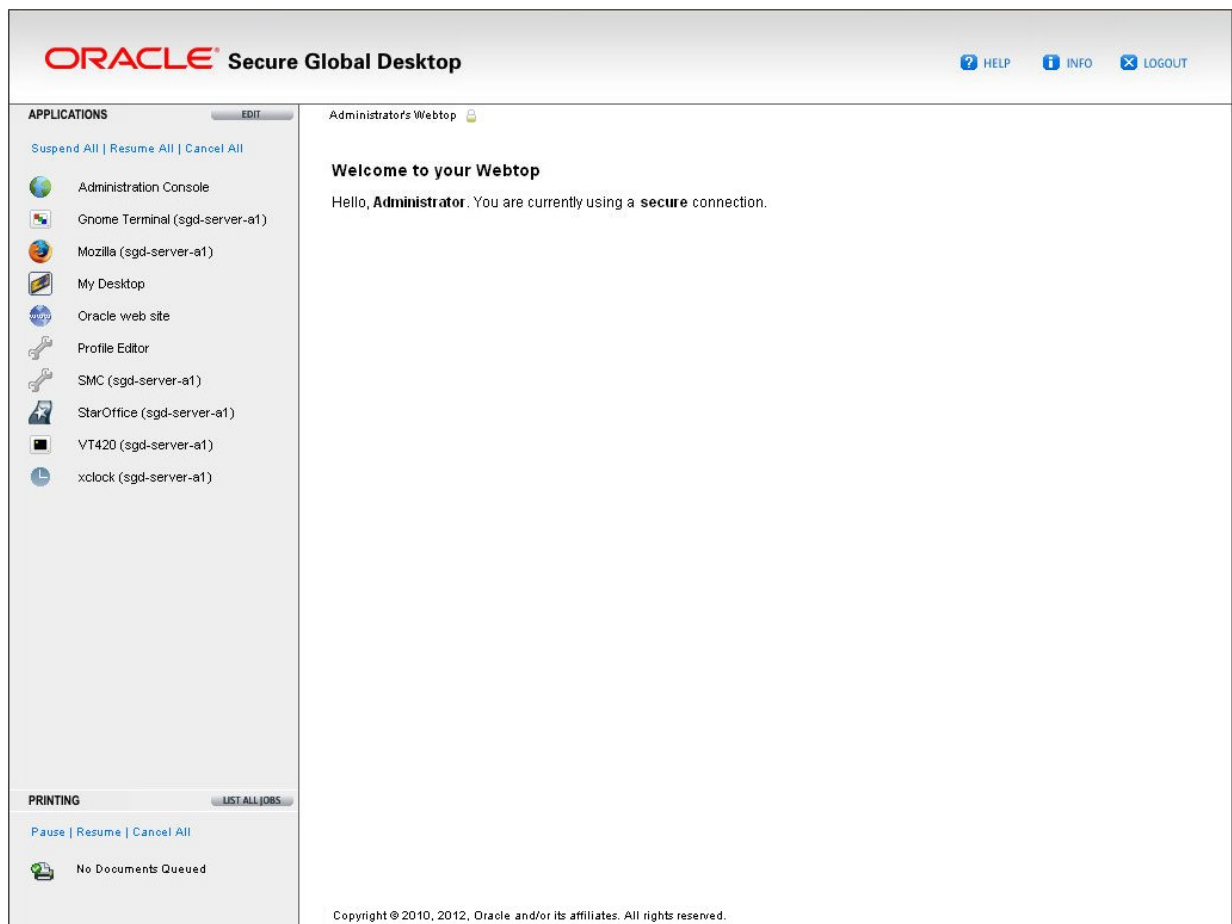
5. 「信頼されない初期接続」メッセージを確認します。

「信頼されない初期接続」メッセージは、SGD Client が信頼済みホストだけに接続するようにするためのセキュリティー機能です。このメッセージが表示されたら、ホスト名とサーバー証明書の詳細を確認してから、接続に同意します。メッセージは、接続先の各 SGD サーバーにつき 1 回だけ表示されます。

ホストの詳細が正しいことを確認します。正しい場合は「はい」をクリックします。正しくない場合は「いいえ」をクリックします。

Administrator ユーザーの Webtop が表示されます (図3.4 「Administrator ユーザーの Webtop」を参照)。

図3.4 Administrator ユーザーの Webtop



SGD Client アイコンがタスクバーに表示されます。図3.5「SGD Client タスクバーアイコン」を参照してください。

図3.5 SGD Client タスクバーアイコン



3.2. Webtop の使用

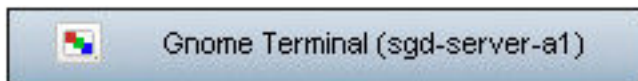
Webtop には、SGD 管理ツールを初めとする、SGD を介してアクセスするアプリケーションとドキュメントが一覧表示されます。

Webtop には、SGD インストールプログラムによってホスト上で検出されたいくつかのサンプルアプリケーションが表示され、このアプリケーションを使って、SGD の使用を開始できます。

3.2.1. アプリケーションの実行

アプリケーションを実行するには、Webtop 上でそのアプリケーションのリンクをクリックします (図3.6「Webtop 上のアプリケーションのリンク」を参照)。

図3.6 Webtop 上のアプリケーションのリンク

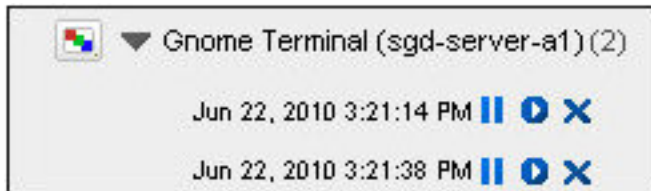


アプリケーションを起動すると、ユーザー名とパスワードの入力を要求される場合があります。これは、そのアプリケーションを実行しているアプリケーションサーバーに対する認証情報です。認証の詳細情報はセキュアな状態でキャッシュすることができるので、ユーザーが1台のアプリケーションサーバーにつき複数回入力する必要はありません。

SGD 管理者は、アプリケーションの表示方法を構成します。アプリケーションには、ウィンドウ装飾なしで全画面表示されるものと、クライアントデバイス上のウィンドウと同じように動作するウィンドウに表示されるものがあります。

あるアプリケーションが実行中である場合、Webtop 上でそのアプリケーションの名前の前に三角形が、その後ろに括弧で囲まれた数字が、それぞれ表示されます。図3.7「セッションツールバー」に示すように、セッションツールバーもアプリケーション名の下に表示されます。

図3.7 セッションツールバー



括弧内の数字は、ユーザーが起動したアプリケーションの独立したインスタンスの個数です。SGD 管理者は、実行できるアプリケーションの同時インスタンスの数を構成します。

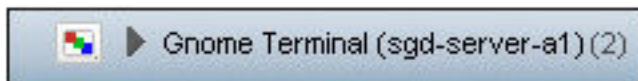
アプリケーションの中には、表示されていなくても実行し続けるように構成されるものもあります。それらは「再開可能な」アプリケーションです。アプリケーションを終了しないでそのアプリケーションのウィンドウを閉じるには、アプリケーションを中断します。ウィンドウを再度表示してアプリケーションを使い始めるには、アプリケーションを再開します。

セッションツールバーは、アプリケーションの実行中のインスタンスごとに存在します。これを次のように使用します。

- アプリケーションセッションを中断するには、中断ボタンをクリックします。
- アプリケーションセッションを再開するには、再開ボタンをクリックします。
- アプリケーションセッションを終了するには、取り消しボタンをクリックします。

図3.8「非表示状態のセッションツールバー」に示すように、アプリケーションセッションのセッションツールバーの表示/非表示を切り替えるには、三角形をクリックします。

図3.8 非表示状態のセッションツールバー



アプリケーション領域の上部にあるリンクから、すべてのアプリケーションセッションを一度に管理できます。これらのリンクは次のように使用します。

- 実行中のすべてのアプリケーションを中断するには、「すべて中断」をクリックします。
- 中断されているすべてのアプリケーションを再開するには、「すべて再開」をクリックします。

- 実行中のアプリケーションや中断されているアプリケーションをすべて終了するには、「すべて取消し」をクリックします。

各アプリケーションは、再開可能かどうかに関する次の 3 つの設定のいずれかをもちます。

設定	説明
使用しない	ユーザーが SGD からログアウトすると、アプリケーションは終了します。 再開可能でないアプリケーションを中断または再開することはできません。
ユーザーセッション中	アプリケーションは、ユーザーが SGD からログアウトするまで動作し続けます。 ログインしている間は、これらのアプリケーションを中断および再開できます。
一般	アプリケーションは、ユーザーが SGD からログアウトしたあとも動作し続けます。 再度ログインした際に、再開ボタンをクリックすると、実行中のアプリケーションが再度表示されます。

再開可能なアプリケーションは、次の理由で役立ちます。

- 起動に時間がかかるアプリケーションを、ユーザーが SGD からログアウトしたあとも実行したままにしておくことができます。
- ユーザーが、移動中にアプリケーションを実行したままにすることができます。
- ブラウザなどがクラッシュした場合に、ユーザーが容易に復旧できます。

3.2.2. 設定の変更

Webtop のアプリケーション領域にある「編集」ボタンをクリックすると、設定を変更できます。

「グループの編集」タブで、ユーザーは、アプリケーションをグループにまとめることで、自身の Webtop を個別設定できます。ユーザーは、グループを表示する方法とタイミングを決定できます。グループは、類似のアプリケーションをまとめたり、使用頻度があまり多くないアプリケーションを隠したりする場合に役立ちます。ユーザーの Webtop 上で実行可能なアプリケーションのリストに対してアプリケーションの追加や削除を行えるのは、SGD 管理者だけです。

「クライアントの設定」タブでは、使用するプロキシサーバーなどの SGD Client の設定を構成できます。設定内容は、クライアントデバイス上のプロファイルに格納されます。

3.2.3. ログアウト

ブラウザを閉じる前に SGD からログアウトする必要があります。そうすることで、SGD がこれ以上実行する必要のないアプリケーションをすべてシャットダウンして、SGD Client を停止できます。

ログアウトを行わないでブラウザを閉じた場合は、SGD Client が引き続き動作しているため、SGD からログアウトされていません。ブラウザを誤って閉じた場合は、再度ログインする方法でのみ、Webtop を表示できます。

SGD からログアウトするには、Webtop 上の「ログアウト」ボタンをクリックし、確認を要求されたら「OK」をクリックします。

3.3. SGD 管理ツール

SGD には、次の管理ツールがあります。

- Administration Console – ユーザーやユーザーセッションの管理、SGD サーバーの構成、および SGD ユーザー用のアプリケーションの構成を行うことができます

- Profile Editor – 組織内のユーザーの SGD Client に使用する設定を定義できます。
- [tarantella](#) コマンド – SGD の制御と構成をコマンド行から行えます

Administration Console および Profile Editor は、SGD 管理者の Webtop 上で使用できます。

3.3.1. Administration Console

Administration Console を表示するには、SGD でサポートされている、Safari 以外の任意のブラウザを使用できます。SGD のサポートされているブラウザの詳細は、『[Oracle Secure Global Desktop 管理者ガイド \(リリース 4.7 用\)](#)』を参照してください。ブラウザで JavaScript プログラミング言語が有効になっている必要があります。

Administration Console は、アレイ内のプライマリ SGD サーバー上で実行すると最適に機能します。

3.3.1.1. Administration Console を起動する

Administration Console を起動するには、Webtop 上の該当するリンクをクリックします。

Webtop を表示しないで Administration Console を実行する場合は、次の場所から実行できます。

- <https://server.example.com> で「Launch the Secure Global Desktop Administration Console」リンクをクリックします
- <https://server.example.com/sgdadmin>

ここで、[server.example.com](#) は SGD サーバーの名前です。

Webtop を表示しないで Administration Console を実行する場合は、SGD 管理者としてログインするように要求されます。

3.3.1.2. Administration Console の使用

Administration Console にログインすると、[図3.9「ナビゲーションビューの Administration Console」](#) に示すように、ナビゲーションビューで Administration Console が開きます。

図3.9 ナビゲーションビューの Administration Console

ORACLE® Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Navigation View

Secure Global Desktop Servers Sessions User Profiles Applications Application Servers Global Settings Caches

Secure Global Desktop Servers

Secure Global Desktop servers are machines running the Secure Global Desktop. By adding at least one other server you create an array. Using an array allows you to distribute load between its servers and increase reliability. One server in the array is the primary server which is responsible for replicating configuration data. Use the Administration Console on the primary server of the array to add additional servers to the array.

Secure Global Desktop Server List (1)

Server	Type	Status	Start Time (BST)	Accepting Connections		User Sessions			Application Sessions		
				Standard	Secure	Standard	Secure	Total	Terminal	Graphical	Total
sgd-server-a1.example.com	Primary Server	Up	2010/06/22 13:25:53	Yes	No	1	0	1	0	0	0

ナビゲーションビューは、SGD のさまざまな領域を管理するためのタブにアクセスできるトップレベルのビューです。次の表に、ナビゲーションビューで利用できるタブと、その使用目的の概要を示します。

タブ	説明
Secure Global Desktop サーバー	SGD サーバーの管理および構成。 このタブの詳細は、「 SGD の管理 」を参照してください。
セッション	ユーザーの SGD セッションおよびアプリケーションセッションの管理。 このタブの詳細は、「 ユーザーの監視 」を参照してください。
ユーザープロファイル	ユーザーの SGD 設定内容の管理および構成。 このタブの詳細は、「 ユーザーの作成 」を参照してください。
アプリケーション	ユーザーが SGD を介して実行できるアプリケーションの管理および構成。 このタブの詳細は、「 Webtop へのアプリケーションの追加 」を参照してください。
アプリケーションサーバー	SGD 経由で表示されるアプリケーションを実行するアプリケーションサーバーの管理および構成。 このタブの詳細は、「 Webtop へのアプリケーションの追加 」を参照してください。
グローバル設定	SGD 全体に適用される設定の構成。 このタブの詳細は、「 SGD の管理 」を参照してください。
キャッシュ	SGD が格納したアプリケーションサーバーのパスワードの管理。

SGD は、次のディレクトリサービスの原則に基づいて構築されています。

- ユーザー、アプリケーション、およびアプリケーションサーバーは、ディレクトリ内のオブジェクトで表現されます。これらのオブジェクトは、組織を表現する組織階層として構成されます。
- オブジェクトのタイプが異なれば、属性として知られている構成設定の内容も異なります。
- オブジェクト間の関係は、重要で意味があります。
- 各オブジェクトは、一意の名前を使用して識別されます。

SGD には、さまざまなタイプのオブジェクトがあります。処理対象のオブジェクトを選択すると、Administration Console がオブジェクトビューに変わります。Administration Console には、オブジェクトビューとナビゲーションビューを切り替えられるリンクが用意されています。また、[図3.10「Administration Console のナビゲーションリンク」](#)に示すように、最近処理したオブジェクト間を相互に切り替えられる「オブジェクト履歴」も用意されています。

図3.10 Administration Console のナビゲーションリンク



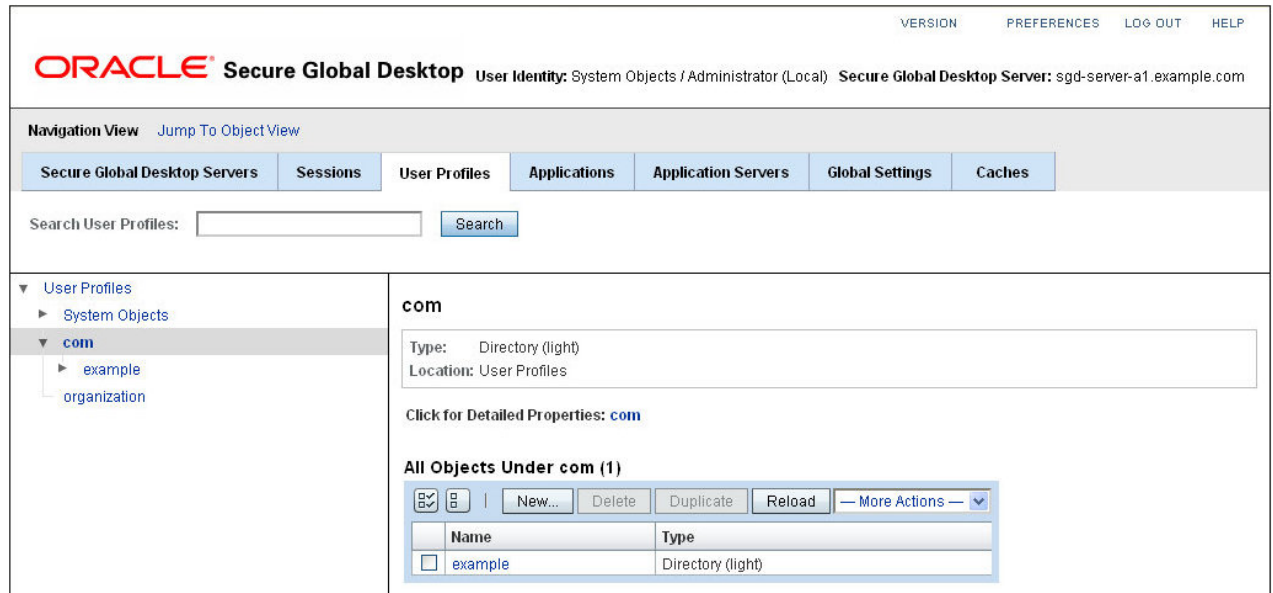
注意

Administration Console の使用中は、ブラウザの「戻る」ボタンを使用しないでください。代わりに、ナビゲーションリンクを使って Administration Console のページ間を移動してください。

「ユーザープロファイル」、「アプリケーション」、および「アプリケーションサーバー」の各タブは、2つのセクションに分けられます。[図3.11「ナビゲーションツリーおよびコンテンツ領域」](#)に示すように、左側がナビゲーションツリーで、右側がコンテンツ領域です。ナビゲーションツリーには、ユーザーの組織階層を構築するために使用さ

れるコンテナオブジェクトだけが表示されます。ナビゲーションツリーでオブジェクトをブラウズして選択すると、選択したオブジェクトに含まれているオブジェクトのリストがコンテンツ領域に表示されます。

図3.11 ナビゲーションツリーおよびコンテンツ領域



Administration Console のタブおよび画面のいくつかには、検索フィールドがあります。検索では大文字と小文字が区別されず、ワイルドカード文字「*」のみを使用できます。検索結果はテーブルに表示され、150 ヒット以内に制限されます。

Administration Console のほとんどのタブは、情報を表形式で表します。表のセル内の情報がリンクになっていて、クリックすると詳細な情報が表示される場合もあります。

3.3.2. tarantella コマンド

tarantella コマンドは、`install-dir/bin` ディレクトリにインストールされるスクリプトです。デフォルトでは、`install-dir` は `/opt/tarantella` です。このスクリプトは標準 `PATH` 上に存在しないため、このコマンドを実行するたびにフルパスを指定するか、コマンドを実行する前に `/opt/tarantella/bin` ディレクトリに移動する必要があります。あるいは、次の操作を行います。

- `/opt/tarantella/bin` を `PATH` に追加します。次に例を示します。

```
PATH=$PATH:/opt/tarantella/bin; export PATH
```

- エイリアスを作成します。次に例を示します。

```
alias t=/opt/tarantella/bin/tarantella
```

tarantella コマンドは実際にはコマンド群であり、各コマンドが独自のサブコマンドセットを持つことができます。サブコマンドは、常に **tarantella** コマンドを介して実行します。次に例を示します。

```
# tarantella config list
```

どのコマンドでも、`--help` コマンド行引数を使用してヘルプを利用できます。

多くのコマンドは、それらを基にしてスクリプトを構築できるように設計されています。

特定の **tarantella** コマンドをどのユーザーが使用できるかに関しては、次の制限が適用されます。

- SGD サーバーおよび SGD Web サーバーを制御するコマンドを実行できるのは、スーパーユーザー (root) だけです

- SGD サーバーのアレイを作成および管理するためのコマンドを実行できるのは、SGD 管理者だけです
- その他のコマンドはすべて、`ttaserv` グループ内のどのユーザーでも実行できます

ユーザーを `ttaserv` グループのメンバーにするには、`usermod -G` コマンドを使用します。`ttaserv` グループは、ユーザーのプライマリグループまたは実効グループである必要はありません。

3.4. ユーザーの作成

このセクションでは、Administration Console を使用して SGD ユーザーを作成する方法について説明します。これを行うには、ユーザープロファイルオブジェクトを作成します。ユーザープロファイルは、SGD にログインできるかどうかや実行できるアプリケーションなどの、ユーザーの SGD 設定を制御するために使用します。このセクションでは、ユーザーを SGD 管理者にする方法についても説明します。

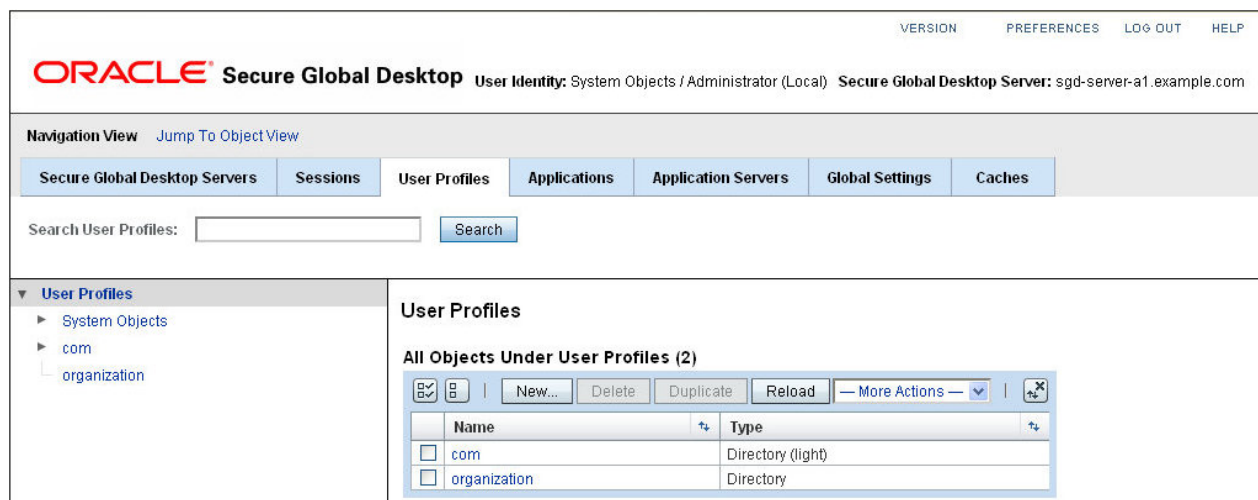


ヒント

ユーザーに関する情報を入手するために LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) デイレクトリを使用するように SGD を構成できます。LDAP 統合用に SGD を構成する場合は、ユーザープロファイルを作成する必要はありません。LDAP 統合用に SGD を構成する方法の詳細は、『Oracle Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』を参照してください。

Administration Console の「ユーザープロファイル」タブでは、ユーザープロファイルを作成および管理します。図 3.12 「「ユーザープロファイル」タブ」を参照してください。

図3.12 「ユーザープロファイル」タブ



デフォルトでは、このタブには、organization と呼ばれるディレクトリオブジェクト (コマンド行では `o=organization`) と com と呼ばれるディレクトリ (軽量) オブジェクト (コマンド行では `dc=com`) の 2 つの「トップレベル」のオブジェクトが含まれています。これらのオブジェクトの名前変更や削除、または新しいトップレベルのオブジェクトの作成を行うことができます。ユーザーの管理に必要なオブジェクトはすべて、これらのトップレベルのオブジェクトタイプ内で作成します。

他のディレクトリオブジェクトを使って、組織を分割できます。たとえば、組織内の部門ごとにディレクトリ (組織単位) を使用することができます。

3.4.1. ユーザープロファイルおよび SGD 管理者の作成

このセクションでは、ユーザー自身のユーザープロファイルを作成する方法、およびユーザー自身を SGD 管理者にする方法について説明します。SGD 管理者は常にユーザープロファイルを持っています。ユーザープロファイルを作成できるのは、SGD 管理者に限られます。

「Global Administrators」ロールに所属するユーザーは、SGD 管理者です。SGD 管理者は、いずれかの SGD 管理ツールを使用して SGD を構成できます。「Global Administrators」ロールに所属していないユーザーは、管理用の特権を持ちません。

「Global Administrators」ロールは、「ユーザープロフィール」タブのシステムオブジェクト組織にあるオブジェクトです。「Global Administrators」ロールオブジェクトは、ユーザーに管理者特権を割り当て、管理ツールへのアクセスを許可するために使用されます。

これらの手順に従ったあとは、UNIX または Linux システムのユーザー名とパスワードを使って SGD にログインし、Administration Console を実行できます。

また、[tarantella object new_person](#) コマンドを使ってユーザープロフィールを作成したり、[tarantella role add_member](#) コマンドを使って SGD 管理者を追加したりすることもできます。

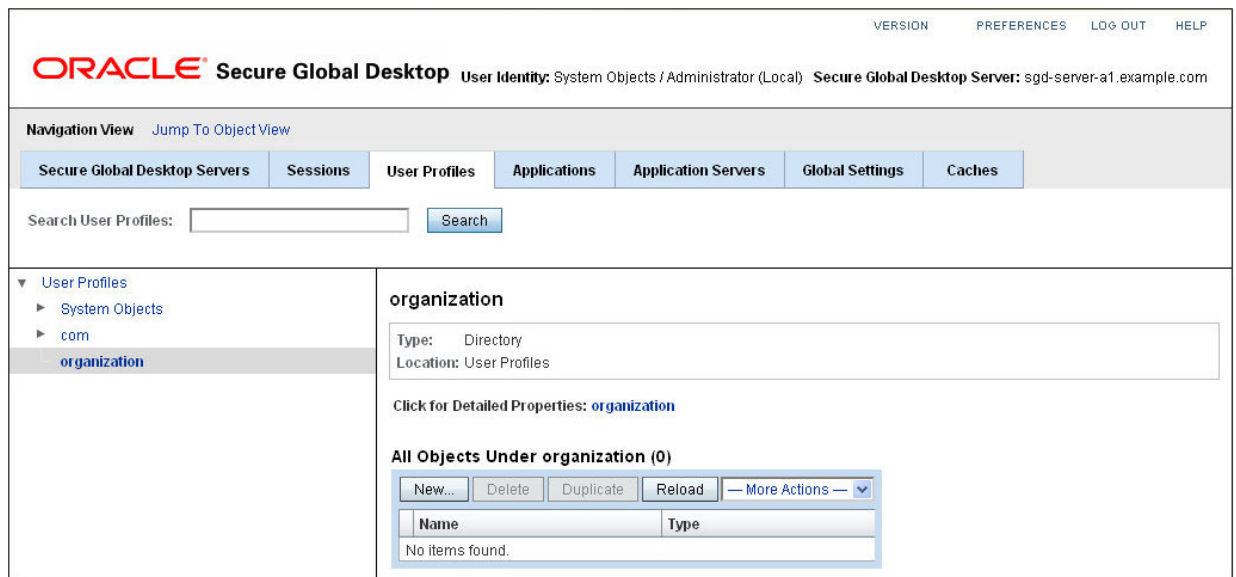
3.4.1.1. ユーザープロフィールを作成する方法

1. Administration Console で、「ユーザープロフィール」タブをクリックします。
2. 組織階層内のオブジェクトを選択します。

ナビゲーションツリーを使用して、組織オブジェクトを選択します (図3.13 「選択された組織オブジェクト」を参照)。

ユーザープロフィールは、必要に応じて、あとで別の場所に移動できます。

図3.13 選択された組織オブジェクト



3. ユーザープロフィールオブジェクトを作成します。

- a. コンテンツ領域の「新規」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが表示されます。

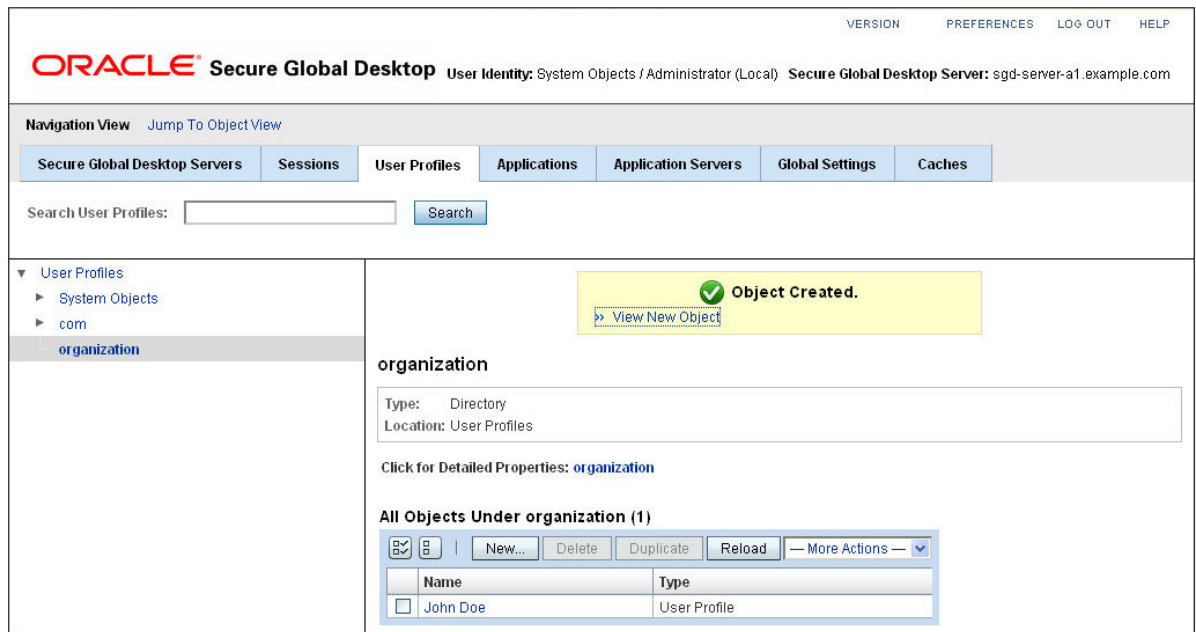
- b. 「名前」フィールドに、ユーザーの名前を入力します。

たとえば、[John Doe](#) などです。

- c. 「ユーザープロフィール」オプションが選択されていることを確認し、「作成」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが閉じ、コンテンツ領域に新しいオブジェクトが反映されます。図 3.14 「新しく作成されたユーザープロフィール」を参照してください。

図3.14 新しく作成されたユーザープロフィール



4. 「新規オブジェクトの表示」リンクをクリックします。

ユーザープロフィールの「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます。図3.15「ユーザープロフィールの「一般」タブ」を参照してください。

5. ユーザープロフィールを構成します。

- a. 「姓」フィールドに、ユーザーの姓を入力します。

たとえば、Doe などです。

- b. 「ログイン」チェックボックスが選択されていることと、「複数」チェックボックスが選択されていないことを確認します。

これにより、ユーザーは確実に SGD にログインできます。

- c. 「ユーザー名」フィールドに、UNIX または Linux システムのユーザー名を入力します。

たとえば、jdoe などです。

この属性は、ユーザーの識別や認証に使用されることがあります。

- d. 「電子メールアドレス」フィールドに、ユーザーの電子メールアドレスを入力します。

たとえば、john.doe@example.com などです。

この属性は、ユーザーの識別や認証に使用されることがあります。

図3.15 ユーザープロフィールの「一般」タブ

The screenshot shows the Oracle Secure Global Desktop web interface. At the top, there's a navigation bar with links for VERSION, PREFERENCES, LOG OUT, and HELP. Below this, the page title is 'ORACLE Secure Global Desktop'. The user identity is 'System Objects / Administrator (Local)' and the server is 'sgd-server-a1.example.com'. The main content area has a tabbed interface with 'General' selected. Other tabs include Performance, Client Device, Printing, Security, Assigned Applications, Passwords, Tokens, User Sessions, and Application Sessions. The 'John Doe - General' section has 'Save' and 'Reset' buttons. The 'Type' is 'User Profile' and the 'Location' is 'User Profiles / organization'. There are expandable sections for 'Designation' and 'Secure Global Desktop Authentication'. The 'Designation' section includes fields for Name (John Doe), Comment (optional), and Surname (Doe). The 'Secure Global Desktop Authentication' section includes a 'Login' checkbox (checked for 'Enabled'), a 'Login Name' field (jdoe), and an 'Email Address' field (john.doe@example.com).

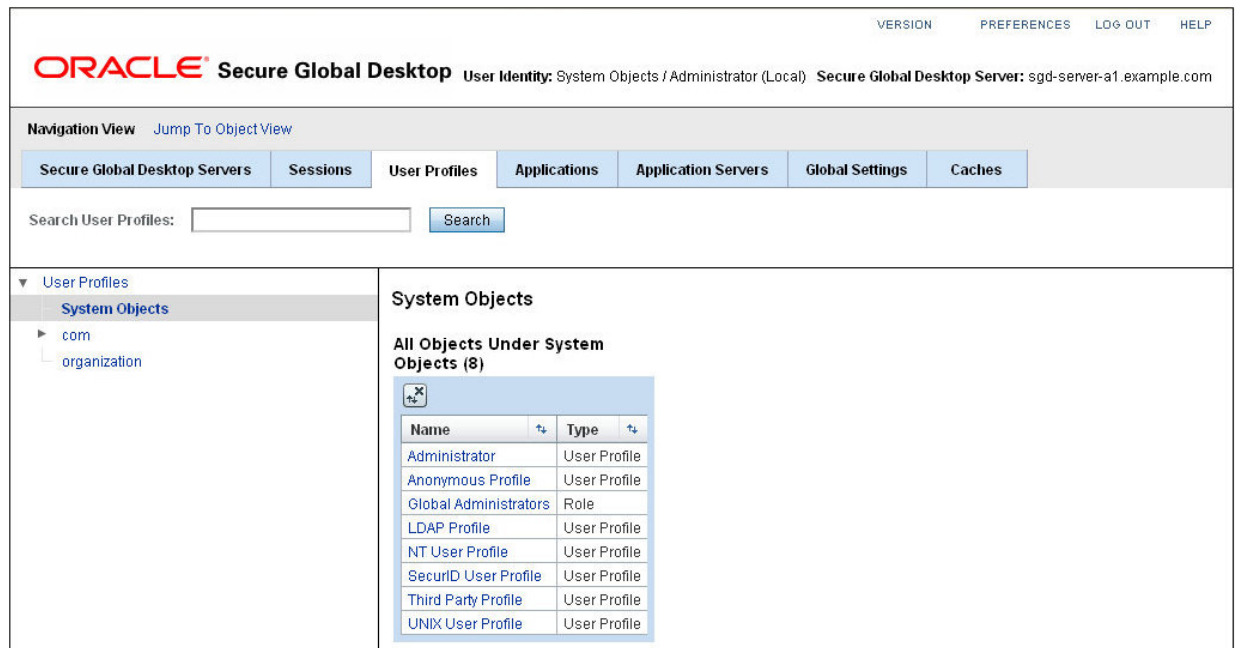
e. 「保存」をクリックします。

3.4.1.2. SGD 管理者を追加する方法

1. Administration Console で、「ユーザープロフィール」タブをクリックします。
2. ナビゲーションツリーで、「システムオブジェクト」をクリックします。

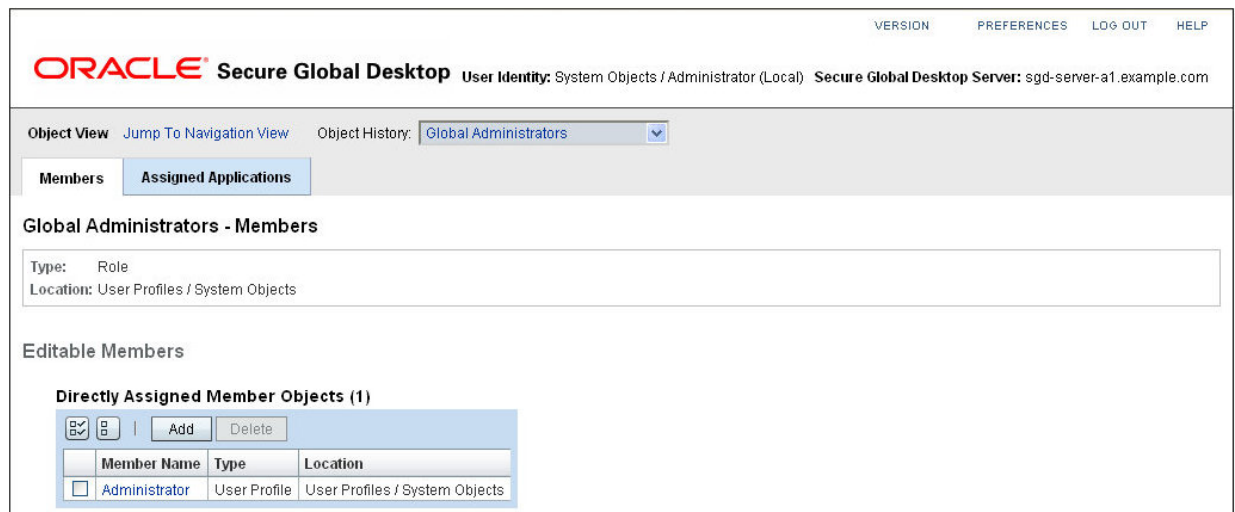
「システムオブジェクト」テーブルがコンテンツ領域に表示されます (図3.16 「システムオブジェクト」テーブルを参照)。

図3.16 「システムオブジェクト」テーブル



- 「システムオブジェクト」テーブルで、「Global Administrators」リンクをクリックします。
- 「メンバー」タブがオブジェクトビューに表示されます (図3.17 「「メンバー」タブ」を参照)。

図3.17 「メンバー」タブ



- 「編集可能なメンバー」テーブルの「追加」をクリックします。
- 「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。図3.18 「「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウ」を参照してください。
- ユーザープロファイルの位置を指定します。
- 「検索」フィールドを使用してユーザープロファイルを見つけるか、ナビゲーションツリーをブラウズします。
- ユーザープロファイルの横にあるチェックボックスを選択し、「追加」をクリックします。

図3.18 「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウ

ORACLE® Secure Global Desktop

Add User Assignment
Select the object to assign.

Name: Global Administrators
Type: Role
Location: User Profiles / System Objects

Search User Profiles:

▼ User Profiles
 ▶ System Objects
 ▶ com
 organization

organization
Type: Directory
Location: User Profiles

All Objects Under organization (1)

	Name	Type
<input checked="" type="checkbox"/>	John Doe	User Profile

「メンバー」タブが表示され、ユーザープロファイルが「編集可能なメンバー」テーブルに表示されます。図3.19「更新された「メンバー」タブ」を参照してください。

図3.19 更新された「メンバー」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View [Jump To Navigation View](#) Object History:

Members **Assigned Applications**

Global Administrators - Members
Type: Role
Location: User Profiles / System Objects

Editable Members

Directly Assigned Member Objects (2)

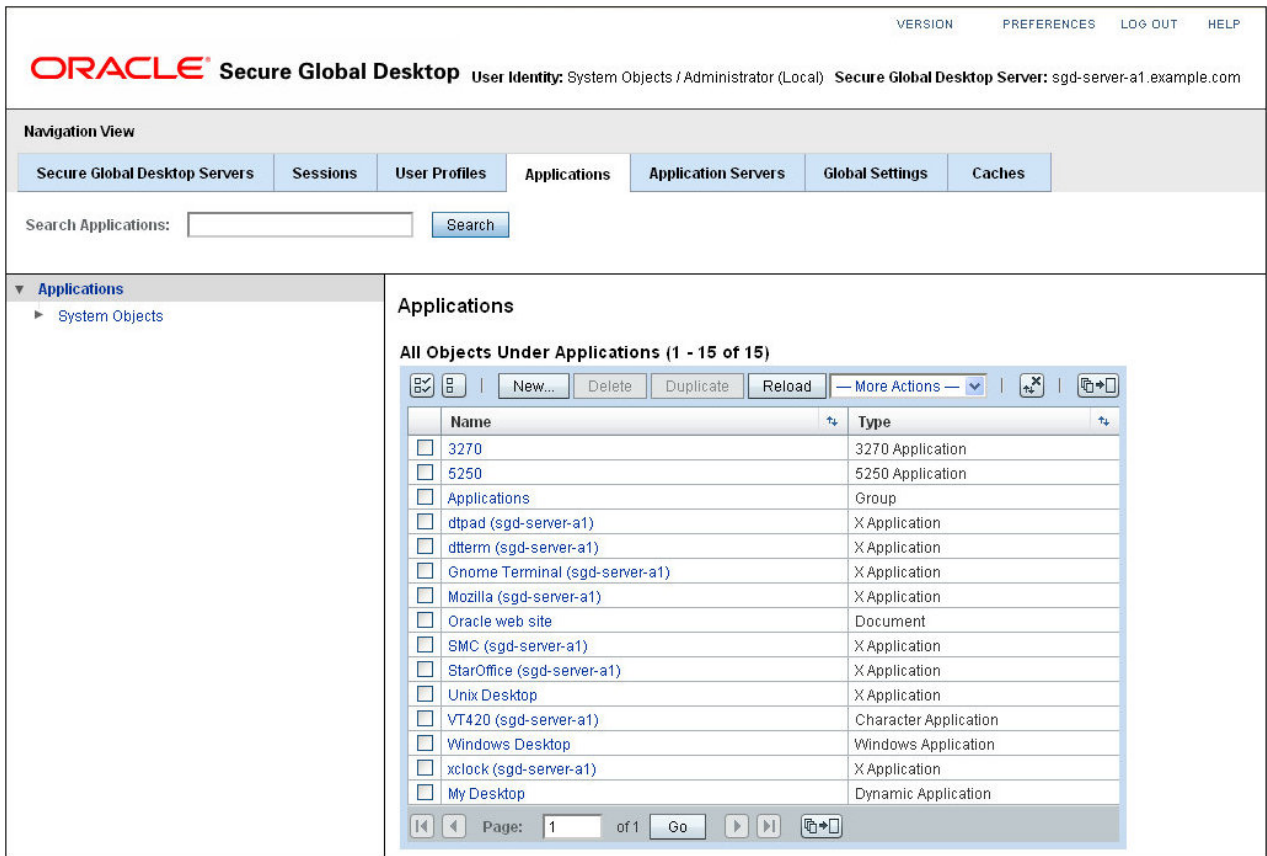
	Member Name	Type	Location
<input type="checkbox"/>	Administrator	User Profile	User Profiles / System Objects
<input type="checkbox"/>	John Doe	User Profile	User Profiles / organization

3.5. Webtop へのアプリケーションの追加

このセクションでは、Administration Console を使って、SGD を介して表示できるアプリケーションオブジェクトを作成する方法、およびそのアプリケーションを起動するためのリンクをユーザーの Webtop 上に表示する方法について説明します。

Administration Console の「アプリケーション」タブでは、ユーザーが SGD を介して実行できるアプリケーションを構成します。図3.20「「アプリケーション」タブ」を参照してください。「アプリケーションサーバー」タブでは、アプリケーションを実行するアプリケーションサーバーを設定します。図3.27「「アプリケーションサーバー」タブ」を参照してください。

図3.20 「アプリケーション」タブ



アプリケーションオブジェクトは、必ずアプリケーション組織 (コマンド行では **o=applications**) に含まれています。アプリケーションサーバーオブジェクトは、必ずアプリケーションサーバー組織 (コマンド行では **o=appservers**) に含まれています。

ディレクトリ (組織単位) オブジェクトを使用して、これらの組織を分割できます。たとえば、ディレクトリオブジェクトを使って、特定の部門で使用するアプリケーションを格納できます。また、アプリケーションやアプリケーションサーバーをグループに整理することもできます。

SGD では、ユーザープロファイル、アプリケーション、およびアプリケーションサーバーの間にリンクまたは関係があります。Administration Console では、これらのリンクを割り当てと呼びます。それぞれの関係は、割り当てタブから管理されます。たとえば、ユーザープロファイルオブジェクトには、ユーザーに割り当てられるすべてのアプリケーションオブジェクトを示す「割り当て済みのアプリケーション」タブが用意されています。これらは、ユーザーの Webtop 上に表示されるアプリケーションです。同様に、アプリケーションオブジェクトには、アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバーを示す「ホストしているアプリケーションサーバー」タブが用意されています。



ヒント

アプリケーションをユーザーに割り当てるために、LDAP ディレクトリの検索を使用するように SGD を構成できます。これは、DSI (Directory Services Integration) と呼ばれます。DSI を構成する方法の詳細は、『オラクル Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』を参照してください。

3.5.1. アプリケーションオブジェクトを割り当てる方法

1. Administration Console で、「アプリケーション」タブをクリックし、アプリケーションオブジェクトを選択します。

「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます。

2. アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバーを指定します。

- a. 「ホストしているアプリケーションサーバー」タブをクリックします。図3.21 「「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ」を参照してください。

図3.21 「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ

VERSION PREFERENCES LOG OUT HELP

ORACLE Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View Jump To Navigation View Object History: Notepad

General Launch Presentation Performance Client Device Printing Hosting Application Servers Assigned User Profiles Application Sessions

Notepad - Hosting Application Servers
This tab page lists the application servers hosting the selected application.

Type: Windows Application
Location: Applications

Effective Application Servers

Application Server Name	Type	Location	Assignment Type
No Assignment Found.			

Editable Assignments

Add Delete

Object Name	Type	Location
No Assignment Found.		

- b. 「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」をクリックします。

「アプリケーションサーバー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。図3.22 「「アプリケーションサーバー割り当ての追加」ウィンドウ」を参照してください。

- c. アプリケーションサーバーの位置を指定します。

「検索」フィールドを使用してアプリケーションサーバーオブジェクトを見つけるか、ナビゲーションツリーをブラウズします。

- d. アプリケーションサーバーオブジェクトの横にあるチェックボックスを選択し、「追加」をクリックします。

複数のアプリケーションサーバーオブジェクトを選択した場合は、SGD によって、アプリケーションサーバー間の負荷分散が行われます。

アプリケーションサーバーオブジェクトを含むグループオブジェクトを選択した場合は、そのグループ内のすべてのアプリケーションサーバーオブジェクトが選択されます。

図3.22 「アプリケーションサーバー割り当ての追加」ウィンドウ

ORACLE® Secure Global Desktop

Add Application Server Assignment
Select the object to assign.

Name: Notepad
Type: Windows Application
Location: Applications

Search Application Servers:

Application Servers

All Objects Under Application Servers (3)

Name	Type
<input checked="" type="checkbox"/> rome	Application Server
<input type="checkbox"/> SGD Broker	Dynamic Application Server
<input type="checkbox"/> Tarantella server sgd-server-a1	Application Server

「有効なアプリケーションサーバー」テーブルが、選択したアプリケーションサーバーオブジェクトで更新されます (図3.23 「更新された「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ」を参照)。

図3.23 更新された「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View [Jump To Navigation View](#) Object History: **Notepad**

General **Launch** **Presentation** **Performance** **Client Device** **Printing** **Hosting Application Servers** **Assigned User Profiles** **Application Sessions**

Notepad - Hosting Application Servers
This tab page lists the application servers hosting the selected application.

Type: Windows Application
Location: Applications

Effective Application Servers

Application Server Name	Type	Location	Assignment Type
rome	Application Server	Application Servers	Direct

Editable Assignments

Object Name	Type	Location
<input type="checkbox"/> rome	Application Server	Application Servers

3. Webtop 上にアプリケーションを表示するユーザーを指定します。
 - a. 「割り当て済みのユーザープロファイル」タブをクリックします。図3.24 「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」を参照してください。

図3.24 「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ

Oracle Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View [Jump To Navigation View](#) Object History: [Notepad](#)

General Launch Presentation Performance Client Device Printing Hosting Application Servers **Assigned User Profiles** Application Sessions

Notepad - Assigned User Profiles
This tab page lists the user objects able to launch the selected application.

Type: Windows Application
Location: Applications

Effective User Profiles

User Name	Type	Location	Assignment Type
Local Assignments			
No Assignment Found.			

Editable Assignments

[Add](#) [Delete](#)

Object Name	Type	Location
No Assignment Found.		

- b. 「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」をクリックします。

「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます (図3.25 「「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウ」を参照)。

- c. ユーザープロファイルの位置を指定します。

「検索」フィールドを使用してユーザープロファイルを見つけるか、ナビゲーションツリーをブラウズします。

アプリケーションオブジェクトは、ユーザープロファイルまたはディレクトリオブジェクトに割り当てることができます。

アプリケーションオブジェクトをディレクトリオブジェクトに割り当てた場合は、そのディレクトリオブジェクトに含まれるすべてのユーザープロファイルが自動的にそのアプリケーションを受け取ります。これは、継承と呼ばれます。アプリケーションオブジェクトをディレクトリオブジェクトに割り当てると、より効率的です。

- d. ユーザープロファイルの横にあるチェックボックスを選択し、「追加」をクリックします。

図3.25 「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウ

ORACLE® Secure Global Desktop

Add User Assignment
Select the object to assign.

Name: Notepad
Type: Windows Application
Location: Applications

Search User Profiles:

▼ User Profiles
 ▶ System Objects
 ▶ com
organization

organization
 Type: Directory
 Location: User Profiles

All Objects Under organization (1)

Name	Type
<input checked="" type="checkbox"/> John Doe	User Profile

「有効なユーザープロファイル」テーブルが、選択したユーザーで更新されます。図3.26「更新された「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」を参照してください。

図3.26 更新された「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View Object History:

General **Launch** **Presentation** **Performance** **Client Device** **Printing** **Hosting Application Servers** **Assigned User Profiles** **Application Sessions**

Notepad - Assigned User Profiles
This tab page lists the user objects able to launch the selected application.

Type: Windows Application
Location: Applications

Effective User Profiles

User Name	Type	Location	Assignment Type
▼ Local Assignments			
John Doe	User Profile	User Profiles / organization	Direct

Editable Assignments

Object Name	Type	Location
<input type="checkbox"/> John Doe	User Profile	User Profiles / organization

- アプリケーションが Webtop 上に表示されていることを確認します。

場合によっては、いったんログアウトしてから、UNIX または Linux システムのユーザー名とパスワードを使ってログインして、Webtop 上のアプリケーションを確認する必要があります。

3.5.2. アプリケーションオブジェクトの作成および割り当て

アプリケーションオブジェクトの作成および割り当てには、次の手順が必要です。

1. アプリケーションサーバーオブジェクトを作成します。

この手順では、アプリケーションを実行するアプリケーションサーバーの名前と場所を指定します。

「[アプリケーションサーバーオブジェクトを作成する方法](#)」を参照してください。

2. アプリケーションオブジェクトを作成します。

この手順では、ユーザーがアプリケーションを起動するときに実行するコマンドとアプリケーションの表示方法を指定します。

「[アプリケーションオブジェクトを作成する方法](#)」を参照してください。

3. アプリケーションオブジェクトを割り当てます。

この手順では、アプリケーションサーバーオブジェクトをアプリケーションオブジェクトに割り当てて、SGD がアプリケーションの実行場所を認識できるようにします。次に、アプリケーションオブジェクトを「ユーザープロファイル」タブのオブジェクトに割り当てて、SGD がアプリケーションのリンクをユーザーの Webtop 上に配置できるようにします。

「[アプリケーションオブジェクトを割り当てる方法](#)」を参照してください。

オブジェクトを作成し、それらを割り当てることができるのは、SGD 管理者に限られます。

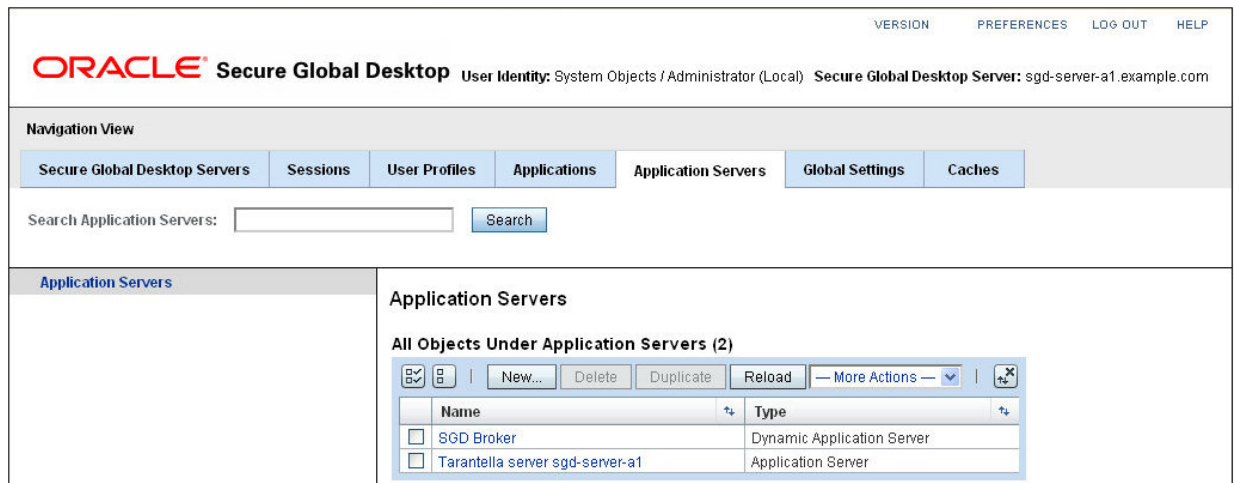
次の手順では、Windows アプリケーションオブジェクトを作成し、割り当てる方法について説明します。他のアプリケーションタイプについても、原則は同じです。

コマンド行で、[tarantella object](#) コマンド群を使って、これらのすべての手順を実行することもできます。

3.5.2.1. アプリケーションサーバーオブジェクトを作成する方法

1. Administration Console で、「アプリケーションサーバー」タブをクリックします。

図3.27 「アプリケーションサーバー」タブ



2. アプリケーションサーバーオブジェクトを作成します。

アプリケーションサーバーオブジェクトをアプリケーションサーバー組織に直接作成します (図3.27 「[アプリケーションサーバー](#)」タブを参照)。作成したアプリケーションは、必要に応じて、あとで別の場所に移動できます。

- a. コンテンツ領域の「新規」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが表示されます。

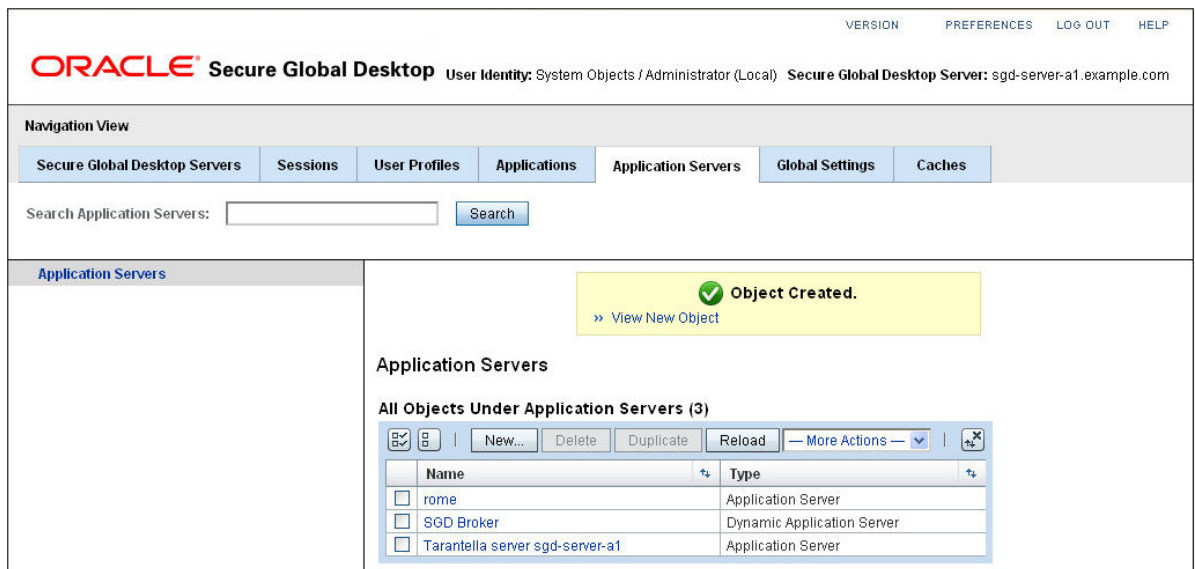
- b. 「名前」フィールドに、アプリケーションサーバーの名前を入力します。

たとえば、**rome** とします。

- c. 「アプリケーションサーバー」オプションが選択されていることを確認し、「作成」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが閉じ、コンテンツ領域に新しいオブジェクトが反映されます。[図 3.28 「新しく作成されたアプリケーションサーバーオブジェクト」](#)を参照してください。

図3.28 新しく作成されたアプリケーションサーバーオブジェクト



3. 「新規オブジェクトの表示」リンクをクリックします。

アプリケーションサーバーオブジェクトの「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます ([図3.29 「アプリケーションサーバーオブジェクトの「一般」タブ」](#)を参照)。

4. アプリケーションサーバーオブジェクトを構成します。

- a. 「アドレス」フィールドに、アプリケーションサーバーの完全修飾ドメイン名システム (DNS) 名を入力します。

たとえば、**rome.example.com** とします。

- b. 「アプリケーション起動」チェックボックスが選択されていることを確認します。

これにより、そのアプリケーションサーバーがアプリケーションの実行に使用可能であることが SGD に通知されます。

- c. 「ドメイン名」フィールドに、Microsoft Windows ドメインの名前を入力します。

たとえば、**rome** とします。

この属性は、ユーザーがアプリケーションを実行する際の認証プロセスに使用されます。

図3.29 アプリケーションサーバーオブジェクトの「一般」タブ

The screenshot displays the Oracle Secure Global Desktop Administration Console interface. At the top, the header includes the Oracle logo, the product name 'Secure Global Desktop', and the user identity 'System Objects / Administrator (Local)'. The server name 'sgd-server-a1.example.com' is also shown. Below the header, there are navigation links for 'Object View', 'Jump To Navigation View', and 'Object History'. A dropdown menu for 'Object History' is set to 'rome'. A series of tabs are visible: 'General' (selected), 'Performance', 'Hosted Applications', 'Application Sessions', and 'Passwords'. The 'rome - General' section contains a 'Save' button and a 'Reset' button. The 'Type' is 'Application Server' and the 'Location' is 'Application Servers'. Under the 'Designation' section, the 'Name' is 'rome' and the 'Comment' field is empty. The 'Address' is 'rome.example.com' with a 'Test' button. The 'Application Start' checkbox is checked and labeled 'Enabled'. The 'User Assignment' field is empty. The 'Maximum Count' field is empty. A 'Back to top' link is at the bottom of the section. The 'Application Authentication' section is partially visible at the bottom.

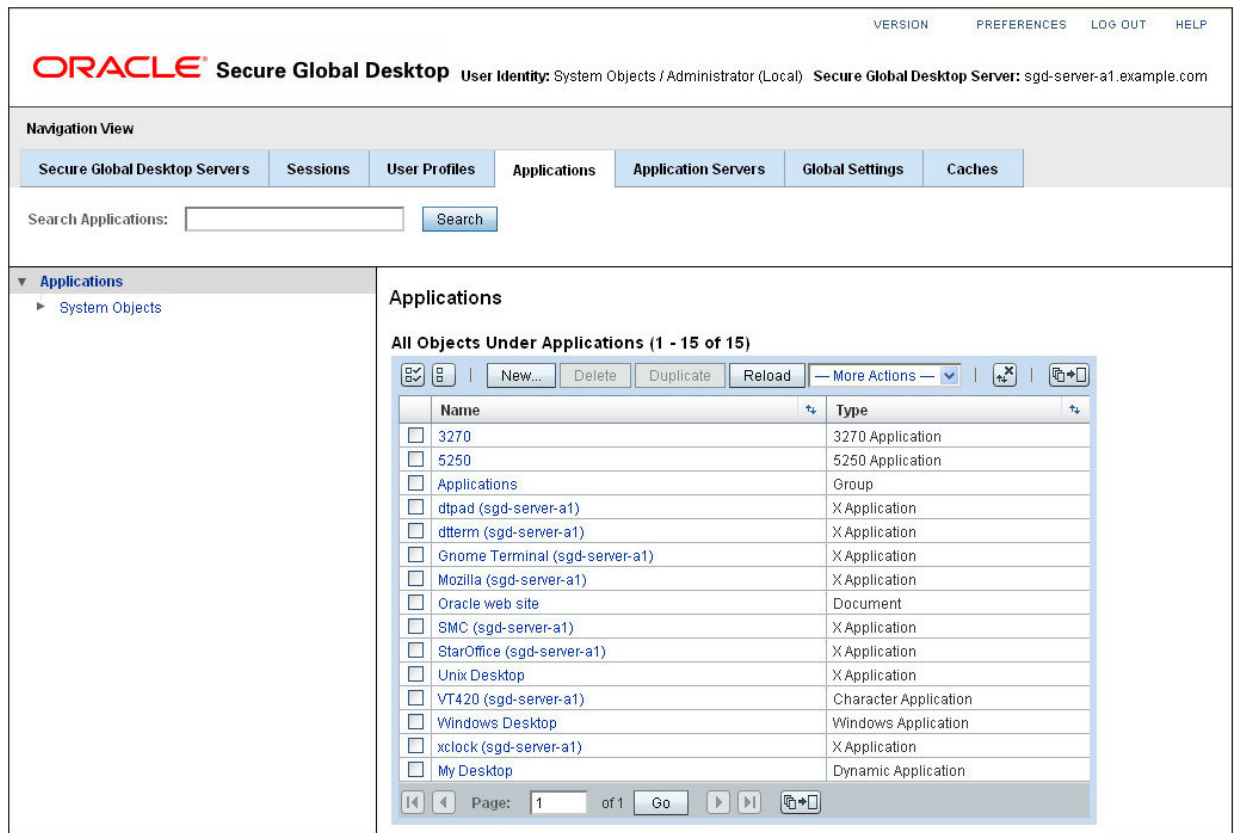
- d. 「保存」をクリックします。

3.5.2.2. アプリケーションオブジェクトを作成する方法

次の手順は、Windows アプリケーションオブジェクトを作成する方法の例を示しています。

1. Administration Console で、「アプリケーション」タブをクリックします。

図3.30 「アプリケーション」タブ



2. アプリケーションオブジェクトを作成します。

アプリケーションオブジェクトをアプリケーション組織に直接作成します (図3.30 「「アプリケーション」タブ」を参照)。作成したアプリケーションは、必要に応じて、あとで別の場所に移動できます。

a. コンテンツ領域の「新規」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが表示されます。

b. 「名前」フィールドに、アプリケーションの名前を入力します。

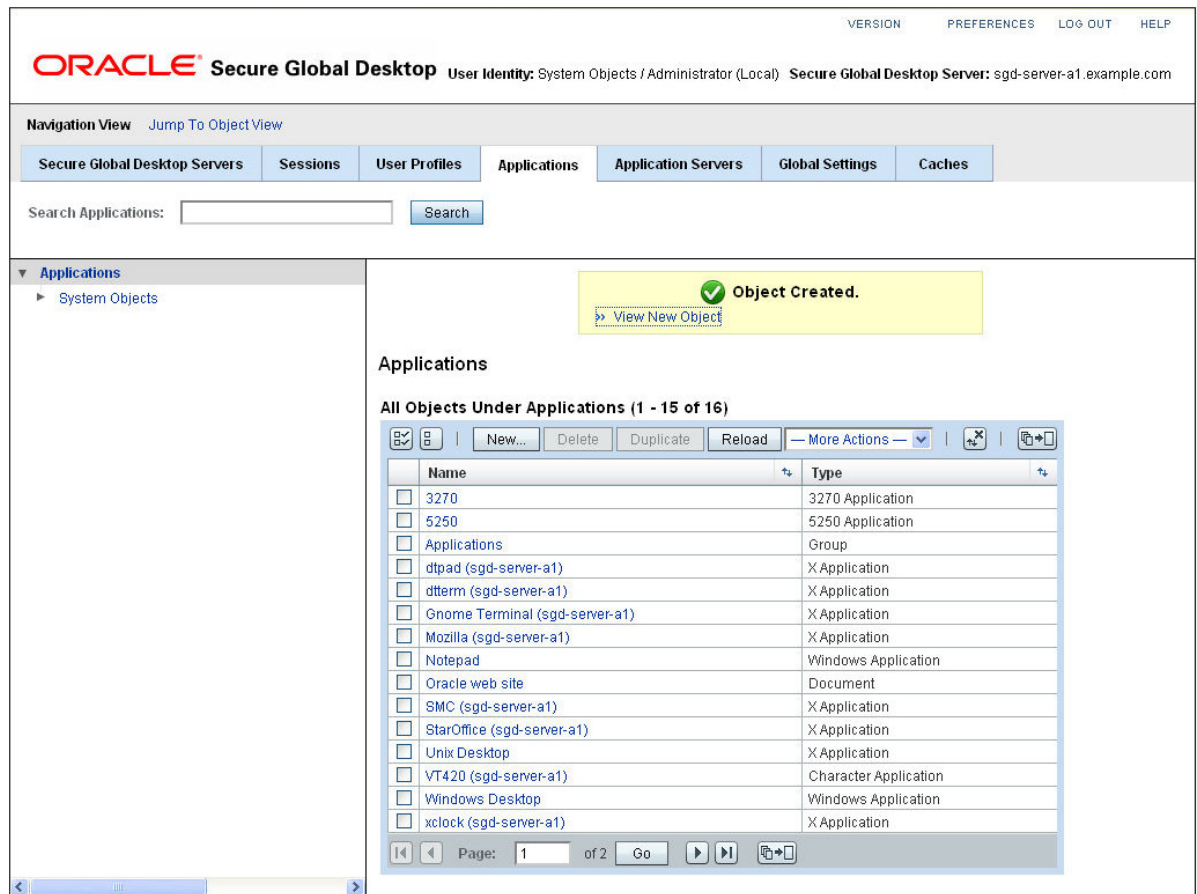
たとえば、**Notepad** とします。

入力した名前は、Webtop 上のアプリケーションリンクに使用されます。

c. 「Windows アプリケーション」オプションが選択されていることを確認し、「作成」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが閉じ、コンテンツ領域に新しいオブジェクトが反映されます (図3.31 「新しく作成されたアプリケーションオブジェクト」を参照)。

図3.31 新しく作成されたアプリケーションオブジェクト



3. 「新規オブジェクトの表示」リンクをクリックします。

アプリケーションオブジェクトの「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます。

4. アプリケーションを構成します。

Windows アプリケーションの構成設定の詳細は、『オラクル Secure Global Desktop 管理者ガイド (リリース 4.7 用)』を参照してください。この例では、次の構成以外は、デフォルトの設定で問題ありません。

- a. 「起動」タブをクリックします。
- b. 「アプリケーションコマンド」フィールドに、アプリケーションコマンドを入力します。

Windows デスクトップセッションの場合は、このフィールドを空白のままにします。

特定のアプリケーションを実行するには、そのアプリケーションを実行するコマンドのフルパスを入力します。たとえば、「C:\Windows\notepad.exe」と入力します。

アプリケーションのインストール先は、すべてのアプリケーションサーバー上で同じ場所でなければいけません。

- c. 「SGD Remote Desktop Client」チェックボックスが選択されていることを確認します。

図3.32 「起動」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop ser Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View Jump To Navigation View Object History: Notepad

General Launch Presentation Performance Client Device Printing Hosting Application Servers Assigned User Profiles Application Sessions

Notepad - Launch Save Reset

Type: Windows Application
Location: Applications

Application Command:
Full path to the application that runs when users click the link. For Windows applications, leave this setting blank to start a full Microsoft Windows session rather than a particular application.

Arguments for Command:
Command-line arguments to use when starting the application. For X applications, do not include the -display argument: the display is set automatically for each user.

Working Directory:
Working directory to be used by the application.

SGD Remote Desktop Client

SGD Remote Desktop Client: ☒ Enabled
Enable SGD Remote Desktop Client if you want to run a Windows application installed on the remote desktop server.

Console Mode: ☐ Enabled
Enable console/remote administration mode when connecting to server.

Enhanced Network Security: ☒ Enabled
Enable enhanced network security when connecting to server.

Arguments:

- d. 「保存」をクリックします。
5. 「プレゼンテーション」タブをクリックします。
 - a. ウィンドウタイプを構成します。

Windows デスクトップセッションの場合は、リストから「キオスク」設定を選択します。

個別のアプリケーションの場合は、リストから「独立ウィンドウ」設定を選択します。「ウィンドウのサイズ」オプションを使用して、ウィンドウのサイズを指定できます。

図3.33 「プレゼンテーション」タブ

The screenshot shows the Oracle Secure Global Desktop Administration Console interface. At the top, there's a header with the Oracle logo and 'Secure Global Desktop' text. Below this, a navigation bar contains tabs: General, Launch, Presentation (selected), Performance, Client Device, Printing, Hosting Application Servers, Assigned User Profiles, and Application Sessions. The main content area is titled 'Notepad - Presentation'. It includes a 'Type' field set to 'Windows Application' and a 'Location' field set to 'Applications'. Under 'Window Type', a dropdown menu is open, showing options: Independent Window (selected), Seamless Window, and Kiosk. To the right of this dropdown, there is explanatory text about each window type. Below the dropdown, there are checkboxes for 'SWM Local Window Hierarchy' (unchecked), 'Kiosk Mode Escape' (checked), and 'Window Manager' (with a text input field). Further down, there are checkboxes for 'Client's Maximum Size' (unchecked), 'RandR Extension' (unchecked), and 'Scale to Fit Window' (unchecked). Below these are input fields for 'Width' (800 pixels) and 'Height' (600 pixels). At the bottom, there is a 'Color Depth' dropdown set to '24/32-bit - Millions of colors'.

- b. 「保存」をクリックします。

3.6. SGD の管理

Administration Console の「グローバル設定」タブでは、SGD 全体に適用される設定を構成します。図3.34 「「グローバル設定」タブ」を参照してください。

図3.34 「グローバル設定」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Navigation View [Jump To Object View](#)

Secure Global Desktop Servers Sessions User Profiles Applications Application Servers Global Settings Caches

Secure Global Desktop Authentication Service Objects Application Authentication Communication Performance Client Device Printing Security Monitoring Resilience

Secure Global Desktop Authentication

Tokens and Cache

Token Generation: ☐ Enabled [Save](#)

Password Cache: ☒ Activated [Save](#)
 The user name and password are stored in the password cache when checked.

[Change Secure Global Desktop Authentication...](#)

Secure Global Desktop Authentication Effective Sequence:

The following list is the order in which the selected Secure Global Desktop authentication mechanisms are tried. If an authentication mechanism fails to authenticate a user, the next mechanism in the list is tried. If an authentication mechanism succeeds, no further mechanisms are tried. For each authentication mechanism, the list shows how Secure Global Desktop establishes the User Identity and the User Profile.

1. System Authentication (performed by Secure Global Desktop):
 1. Unix Authentication: search for the User Identity in the Local Repository and use the matching User Profile.
 2. Unix Authentication: use the UNIX User Identity and search for a matching User Profile in the Local Repository using the user's Unix Group ID.

「グローバル設定」タブには、SGD を構成および管理するためのタブがほかにもいくつかあります。たとえば、「Secure Global Desktop 認証」タブでは、SGD に対してユーザーを認証する方法を構成します。

Administration Console の「Secure Global Desktop サーバー」タブでは、個々の SGD サーバーを管理します。図 3.35 「「Secure Global Desktop サーバー」タブ」を参照してください。

図3.35 「Secure Global Desktop サーバー」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Navigation View

Secure Global Desktop Servers Sessions User Profiles Applications Application Servers Global Settings Caches

Secure Global Desktop Servers

Secure Global Desktop servers are machines running the Secure Global Desktop. By adding at least one other server you create an array. Using an array allows you to distribute load between its servers and increase reliability. One server in the array is the primary server which is responsible for replicating configuration data. Use the Administration Console on the primary server of the array to add additional servers to the array.

Secure Global Desktop Server List (1)

[Add...](#) [Remove](#) [Make Primary](#) [Reload](#)

Server	Type	Status	Start Time (BST)	Accepting Connections		User Sessions			Application Sessions		
				Standard	Secure	Standard	Secure	Total	Terminal	Graphical	Total
sgd-server-a1.example.com	Primary Server	Up	2010/06/22 13:25:53	Yes	No	1	0	1	0	0	0

「Secure Global Desktop サーバー」タブには、SGD サーバーのステータス、このサーバーが動作中かどうか、存在しているユーザーセッションの数、およびこのサーバーがホストしているアプリケーションセッションの数が表示されます。

「Secure Global Desktop サーバーのリスト」の表から SGD サーバーの名前をクリックすると、Administration Console のオブジェクトビューに追加のタブが表示されます。これらのタブを使用して、選択した SGD サーバーを構成したり管理したりします。図3.36 「SGD サーバーの「一般」タブ」を参照してください。

図3.36 SGD サーバーの「一般」タブ

The screenshot shows the Oracle Secure Global Desktop Administration Console interface. At the top, there's a header with the Oracle logo and 'Secure Global Desktop' text. Below that, a navigation bar contains tabs: 'General', 'Security', 'Performance', 'Protocol Engines', 'User Sessions', and 'Application Sessions'. The 'General' tab is selected. The main content area is titled 'sgd-server-a1.example.com - General'. It includes a 'Type: Primary Server' field, an 'External DNS Names' section with a text area containing '*sgd-server-a1.example.com', a 'User Login' section with a checked 'Allowed' checkbox, and a 'Redirection URL' section with an empty text area. There are 'Save' and 'Reset' buttons at the bottom right.

コマンド行からグローバル設定や SGD サーバーを構成するには、[tarantella config](#) コマンドを使用します。すべてのコマンド行引数の詳細は、『[オラクル Secure Global Desktop 管理者ガイド \(リリース 4.7 用\)](#)』を参照してください。

3.6.1. アレイ

「Secure Global Desktop サーバー」タブでは、SGD サーバーを 1 つにグループ化してアレイを形成できます。アレイとは、構成情報を共有する一連の SGD サーバーを指します。

アレイは、次のサーバーで構成されます。

- 1 台のプライマリサーバー – このサーバーは、グローバルな SGD 情報の権限を持つソースであり、組織階層の最終的なコピーを管理します
 - 1 台以上のセカンダリサーバー – これらのサーバーには、プライマリサーバーによって情報が複製されます
- 1 台のスタンドアロンサーバーは、セカンダリサーバーがないアレイ内のプライマリサーバーと見なされます。

アレイ内の SGD サーバーでは、異なるオペレーティングシステムを実行できます。ただし、アレイのすべてのメンバーが、同じバージョンの SGD を実行する必要があります。

SGD の評価期間中は、2 台以内の SGD サーバーを含むアレイに制限されます。ライセンスキーをインストールすると、この制限はなくなります。

アレイには、次のような利点があります。

- ユーザーセッションとアプリケーションセッションが、アレイ全体で負荷分散されます。ユーザー数を増やすには、アレイにさらに多くの SGD サーバーを追加するだけです。
- 複数のサーバーを使うので、シングルポイント障害がなくなります。ユーザーへの影響を最低限に抑えて、サーバーを一時的に運用停止することができます。

- 組織階層内のすべてのオブジェクトを含む構成情報が、アレイのメンバーすべてに複製されます。アレイのすべてのメンバーが、すべての情報にアクセスすることができます。

どの SGD サーバーにログインした場合でも、同じ Webtop が表示され、ユーザーはアプリケーションを再開できません。

「Secure Global Desktop サーバー一覧」の表で「追加」をクリックして、SGD サーバーをアレイに追加します。

3.6.2. ユーザーの監視

進行中のユーザーセッションとアプリケーションセッションを監視することにより、ユーザーが行なっていることを追跡できます。ユーザーセッションおよびアプリケーションセッションは、常にユーザー識別情報およびユーザープロファイルに関連付けられます。ユーザー識別情報は、ユーザーの一意の認証された識別情報です。ユーザープロファイルは、ユーザーの設定を含む SGD ユーザープロファイルオブジェクトです。

3.6.2.1. ユーザーのアプリケーションセッションをシャドウイングする方法

アプリケーションで問題が発生している場合は、Administration Console を使用してユーザーのアプリケーションセッションを検出したあと、そのセッションをシャドウイングできます。

1. ユーザーのアプリケーションセッションを検出します。

Administration Console で、次のいずれかを行います。

- ユーザープロファイルオブジェクトの「アプリケーションセッション」タブに移動します。

このタブには、ユーザーのアプリケーションセッションが一覧表示されます。

- アプリケーションオブジェクトの「アプリケーションセッション」タブに移動します。

このタブには、現在そのアプリケーションを実行しているユーザーが一覧表示されます。

2. 「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションを選択します。

3. アプリケーションセッションのシャドウイングを開始します。

「シャドウイング」ボタンをクリックします。

ユーザーの画面に、セッションのシャドウイングを許可するかどうかを確認するダイアログボックスが表示されます。ユーザーが同意すると、管理者の画面に新しいウィンドウが開き、実行中のアプリケーションが表示されます。管理者とユーザーの双方が、マウスポインタを操作したりアプリケーションを使用したりできます。

4. ユーザーの問題を修正したあと、アプリケーションセッションのシャドウイングを終了します。

シャドウイングウィンドウを閉じても、アプリケーションは閉じません。

ユーザーの画面に、現在このセッションをだれもシャドウイングしていないことを示すダイアログボックスが表示されます。

3.6.2.2. ユーザーセッション

ユーザーセッションは、ユーザーが SGD にログインした時点で始まり、ユーザーがログアウトした時点で終わります。ユーザーセッションは、ユーザーがログインした SGD サーバーによってホストされます。ユーザーセッションには、標準セッションまたはセキュアセッションを使用できます。セキュアセッションが使用可能なのは、SGD セキュリティーサービスが有効になっている場合だけです。

すでにユーザーセッションが開かれている場合にユーザーがログインすると、ユーザーセッションは新しい SGD サーバーに転送され、古いセッションは終了します。これは、セッションの乗っ取りまたはセッションの移動と呼ばれることがあります。

Administration Console では、次の手順でユーザーセッションを一覧表示できます。

- ナビゲーションビューの「セッション」タブには、アレイ内のすべての SGD サーバーで実行されているすべてのユーザーセッションが表示されます。

- SGD サーバーの「ユーザーセッション」タブには、そのサーバーでホストされているすべてのユーザーセッションが表示されます。
- ユーザープロファイルの「ユーザーセッション」タブには、そのユーザープロファイルに関連付けられているすべてのユーザーセッションが表示されます。

「セッション」タブと「ユーザーセッション」タブでは、ユーザーセッションを選択して終了させることができます。「ユーザーセッション」タブでは、クライアントデバイスに関して SGD Client で検出された情報など、ユーザーセッションの詳細を表示できます。

コマンド行からユーザーセッションを一覧表示したり終了したりするには、[tarantella webtopsession](#) コマンドを使用します。

3.6.2.3. アプリケーションセッション

アプリケーションセッションは、ユーザーがアプリケーションを起動した時点で始まり、アプリケーションを終了した時点で終わります。各アプリケーションセッションは、SGD を使って現在実行中のアプリケーションの 1 つに対応しています。アプリケーションセッションは、実行中であることも、中断していることもあります。

アプリケーションセッションは、アレイ内のいずれの SGD サーバーでもホストできます。ユーザーがログインしたのと同じ SGD サーバーではない場合もあります。

Administration Console では、次の手順でアプリケーションセッションを一覧表示できます。

- SGD サーバーの「アプリケーションセッション」タブには、そのサーバーでホストされているすべてのアプリケーションセッションが表示されます。
- ユーザープロファイルの「アプリケーションセッション」タブには、そのユーザープロファイルに関連付けられているすべてのアプリケーションセッションが表示されます。
- アプリケーションサーバーの「アプリケーションセッション」タブには、そのアプリケーションサーバーで実行されているすべてのアプリケーションが表示されます。

「アプリケーションセッション」タブでは、アプリケーションセッションの詳細を表示できます。また、アプリケーションセッションを終了したりシャドウイングしたりすることもできます。シャドウイングを使用すると、管理者とユーザーは同じアプリケーションを同時に使って対話することができます。



注記

シャドウイングできるのは、Windows アプリケーションと X アプリケーションだけです。また、アプリケーションセッションを中断してはいけません。

アプリケーションセッションをシャドウイングする方法については、「[ユーザーのアプリケーションセッションをシャドウイングする方法](#)」を参照してください。

コマンド行からアプリケーションセッションを一覧表示、終了、シャドウイングするには、[tarantella emulatorsession](#) コマンドを使用します。

3.7. SGD の制御

コマンド行から SGD を制御するには、[tarantella start](#)、[tarantella stop](#)、および [tarantella restart](#) コマンドを使用します。

SGD サーバーと SGD Web サーバーを制御するには、次のコマンドを使用します。

- [tarantella start](#) – SGD Web サーバーと SGD サーバーを起動します
- [tarantella stop](#) – SGD Web サーバーと SGD サーバーを停止します
- [tarantella restart](#) – SGD Web サーバーと SGD サーバーをいったん停止してから再起動します

[tarantella start](#)、[tarantella stop](#)、および [tarantella restart](#) コマンドのサブコマンドを使用すると、次のように SGD の個々のコンポーネントを制御できます。

- `sgd` サブコマンドは、SGD サーバーを制御します。次の例では、ホスト上で、印刷サービスを含む SGD サービスを起動します。

```
# tarantella start sgd
```

- `webserver` サブコマンドは、SGD Web サーバーを制御します。次の例では、SGD Web サーバーをいったん停止してから再起動します。

```
# tarantella restart webserver
```

`tarantella stop`、`tarantella start`、および `tarantella restart` コマンドに使用できるサブコマンドとオプションの詳細は、『[Oracle Secure Global Desktop 管理者ガイド \(リリース 4.7 用\)](#)』を参照してください。

3.7.1. SGD 拡張モジュールの制御

このセクションでは、SGD 拡張モジュールを制御する方法について説明します。

3.7.1.1. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールの制御

Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールすると、負荷分散サービスがただちに開始されます。負荷分散サービスは、Windows ホストがリブートされたときにも自動的に開始されます。

負荷分散サービスを手動で制御する方法

Windows ホスト上の負荷分散サービスの停止と開始を手動で行うには、次の手順を使用します。

1. 管理者特権を持つユーザーで Windows ホストにログインします。
2. Windows の「コントロール パネル」で「管理ツール」をクリックします。
3. 「コンピュータの管理」をクリックします。
4. ツリーで「サービスとアプリケーション」を展開します。
5. 「サービス」をクリックします。
6. 「Tarantella Load Balancing Service」をダブルクリックします。
7. 「停止」または「開始」をクリックして、サービスを停止または開始します。

3.7.1.2. UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールの制御

UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをインストールすると、負荷分散および UNIX オーディオのプロセスがただちに開始されます。クライアントドライブマッピングのプロセスは追加の構成を必要とするため、手動で開始する必要があります。

ホストがリブートされるたびに、拡張モジュールのすべてのプロセスが自動的に開始されます。

UNIX プラットフォームと Linux プラットフォームでは、`tem` コマンドを使用して拡張モジュールのプロセスを手動で制御できます。`tem` コマンドは、`install-dir/bin` ディレクトリにインストールされるスクリプトです。デフォルトでは、`install-dir` は `/opt/tta_tem` です。このスクリプトは標準 `PATH` 上に存在しないため、このコマンドを実行するたびにフルパスを指定するか、コマンドを実行する前に `/opt/tta_tem/bin` ディレクトリに移動する必要があります。あるいは、次の操作を行います。

- `/opt/tta_tem/bin` を `PATH` に追加します。次に例を示します。

```
PATH=$PATH:/opt/tta_tem/bin; export PATH
```

- エイリアスを作成します。次に例を示します。

```
alias em=/opt/tta_tem/bin/tem
```

拡張モジュールのプロセスを手動で制御するには、次のコマンドをスーパーユーザー (root) で実行します。

- `tem start` – 負荷分散のプロセスを開始します
- `tem stop` – 負荷分散のプロセスを停止します
- `tem startcdm` – CDM のプロセスを起動します
- `tem stopcdm` – CDM のプロセスを停止します
- `tem startaudio` – UNIX プラットフォームオーディオのプロセスを開始します
- `tem stopaudio` – UNIX プラットフォームオーディオのプロセスを停止します

拡張モジュールの各種モジュールのステータスを表示するには、`tem status` コマンドを使用します。

3.8. SGD ネットワークアーキテクチャー

SGD は、次の層から構成される 3 層ネットワークアーキテクチャーモデルを中核にして構築されています。

- クライアントデバイス
- SGD サーバー
- アプリケーションサーバー

同一ホスト上に複数の層を常駐させることができます。たとえば、1 台の UNIX プラットフォームのホストで、SGD サーバーおよびアプリケーションサーバーの両方を稼働できますが、層は論理的に独立させておく必要があります。

3.8.1. クライアントデバイス

第 1 層には、クライアントデバイスがあります。クライアントデバイスは 1 台のハードウェアであり、ブラウザと SGD Client を使って SGD と通信できます。

ブラウザは、第 2 層の SGD Web サーバーと通信し、ユーザーに対して Webtop を表示します。

SGD Client は、第 2 層の SGD サーバーと通信し、ユーザーが実行するアプリケーションを表示します。

Adaptive Internet Protocol (AIP) は、第 1 層と第 2 層の間でネットワークを最適に利用できるようにします。

3.8.2. SGD サーバー

第 2 層には、SGD サーバーがあり、第 1 層と第 3 層の間のゲートウェイとして機能します。この層は、1 台の SGD サーバーで構成されているか、アレイを形成するように構成された複数の SGD サーバーで構成されています。

SGD サーバーは次の処理を行います。

- ユーザーが SGD にログインする際に、ユーザーを認証します
- ユーザーがアプリケーションを起動する際に、アプリケーションサーバーとネゴシエートしてユーザーを認証し、必要に応じてパスワードの入力を要求します
- アプリケーションを表示するように SGD Client に要求します
- ユーザーがログアウトしたあとも実行されているアプリケーションを追跡し、あとで再開できるようにします

3.8.3. アプリケーションサーバー

第 3 層には、アプリケーションサーバーがあり、ユーザーのアプリケーションを実行します。

ユーザーが Webtop 上のリンクをクリックすると、SGD は該当するアプリケーションサーバー上でアプリケーションを起動します。アプリケーションからの出力は、SGD サーバーによって、アプリケーションサーバーからクライアントデバイスにリダイレクトされます。

アプリケーションに関して SGD を設定する場合、そのアプリケーションを実行できるすべてのアプリケーションサーバーに関する情報を入力します。SGD によって、アプリケーションサーバー間の負荷分散が行われます。

3.9. 次の作業

このセクションでは、SGD ユーザーに通知する必要がある内容と、オンラインドキュメントを表示する方法について説明します。

3.9.1. ユーザーに通知する必要がある内容

次の情報は、SGD を使う人に役立つ重要な情報です。

- SGD にログインする方法。

ユーザーは、ログイン URL を知っている必要があります。<https://server.example.com/sgd> を使用します。ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。

ユーザーは、SGD にログインするために入力するユーザー名とパスワードを知っておく必要があります。

SGD では、ユーザー認証用の複数のメカニズムがサポートされます。ユーザー名とパスワードは、使用可能な認証メカニズムによって変わります。デフォルトでは、ユーザーの UNIX または Linux システムのユーザー名とパスワードを使ってログインできます。

Java テクノロジを使用していない組織では、SGD Client を手動でダウンロードしてインストールする方法をユーザーに示す必要があります。

- アプリケーションを実行する方法。

ユーザーは、アプリケーションを起動および停止する方法を知っている必要があります。

ユーザーが SGD を介してアクセスできるアプリケーションは、多数の異なるアプリケーションサーバーで実行される場合があります。ユーザーがリンクをクリックしてアプリケーションを起動すると、SGD がアプリケーションサーバーのユーザー名とパスワードの入力を要求する場合があります。ユーザーは、使用するユーザー名とパスワードを知っている必要があります。

- ヘルプの入手場所。

すべてのユーザーの Webtop には、SGD ドキュメントへのリンクがあります。「ヘルプ」をクリックします。

3.9.2. 詳細ヘルプの入手場所

Webtop で「ヘルプ」をクリックすると、SGD を構成および実行するためのオンラインドキュメントが表示されます。オンラインドキュメントは、Administration Console を使用しているときも利用できます。

HTML および PDF 形式のドキュメントには、次の場所からアクセスできます。

- <https://server.example.com>、ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。

- <http://www.oracle.com/technetwork/jp/index.html/documentation/sgd-193668.html>

<http://forums.oracle.com/forums/forum.jspa?forumID=914> にある SGD フォーラムで、技術的な問題について話し合うこともできます。

第4章 SGD の削除

この章では、Oracle Secure Global Desktop (SGD) を削除する方法について説明します。

4.1. SGD の削除

SGD を削除するには、ホスト上、アプリケーションサーバー上、およびクライアントデバイス上にインストールされているコンポーネントを削除します。

4.1.1. Oracle Solaris プラットフォーム上の SGD を削除する方法

SGD サーバーがアレイのメンバーである場合は、SGD サーバーをアレイから削除します。これを行うには `tarantella array` コマンドを使用できます。

1. SGD ホスト上でスーパーユーザー (root) としてログインします。
2. SGD を削除します。

```
# tarantella uninstall --purge
```



注意

`tarantella uninstall` コマンドは、SGD を削除するための推奨される方法です。このコマンドは、SGD のプロセスをすべて停止してから、ソフトウェアを削除します。`pkgrm` コマンドを直接使用して SGD を削除しないでください。

4.1.2. Linux プラットフォーム上で SGD を削除する方法

SGD サーバーがアレイのメンバーである場合は、SGD サーバーをアレイから削除します。これを行うには `tarantella array` コマンドを使用できます。

1. SGD ホスト上でスーパーユーザー (root) としてログインします。
2. SGD を削除します。

- 64 ビット Oracle Linux 6 プラットフォームの場合:

```
# tarantella stop  
# yum remove tta  
# rm -fr install-dir
```

ここで、`install-dir` は SGD のインストールディレクトリです。デフォルトでは、これは `/opt/tarantella` です。



注意

`yum` を使用して SGD をインストールした場合、`yum` を使用して SGD を削除する必要があります。

- サポートされるほかの Linux プラットフォームの場合:

```
# tarantella uninstall --purge
```



注意

`tarantella uninstall` コマンドは、SGD を削除するための推奨される方法です。このコマンドは、SGD のプロセスをすべて停止してから、ソフトウェアを削除します。`rpm` コマンドを直接使用して SGD を削除しないでください。

4.1.3. Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法

1. 管理者特権を持つユーザーで Windows ホストにログインします。

2. Windows の「コントロール パネル」で「プログラムの追加と削除」を選択します。
3. Secure Global Desktop 拡張モジュールを選択します。
4. 次のいずれかを実行します。
 - Microsoft Windows XP プラットフォームの場合: 「削除」をクリックします。
 - Microsoft Windows 7 プラットフォームの場合: 「アンインストール」をクリックします。

4.1.4. UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法

1. スーパーユーザー (root) としてアプリケーションサーバーにログインします。
2. 拡張モジュールを削除します。

ソフトウェアを削除する前に、次のコマンドを使用してすべての拡張モジュールプロセスを停止します。

Oracle Solaris プラットフォームの場合:

```
# pkgrm tem
```

Linux プラットフォームの場合:

```
# rpm -e tem
```



注記

拡張モジュールのインストールディレクトリと、このディレクトリ内の一部の構成ファイルは削除されません。拡張モジュールのデフォルトのインストールディレクトリは `/opt/tta_tem` です。

4.1.5. Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (手動インストール)

SGD Client を手動でインストールした場合にだけ、ここで説明する手順に従ってください。

1. SGD Client プログラムを削除します。
 - システム規模のインストールの場合:
 - a. Windows の「コントロール パネル」で「プログラムの追加と削除」を選択します。
 - b. オラクル Secure Global Desktop Client を選択します。
 - c. 次のいずれかを実行します。
 - Microsoft Windows XP プラットフォームの場合: 「削除」をクリックします。
 - Microsoft Windows 7 プラットフォームの場合: 「アンインストール」をクリックします。
 - ユーザー指定のインストールの場合:

SGD Client がインストールされている場所から、このプログラムを削除します。デフォルトの場所はユーザーのホームフォルダで、次のとおりです。

Microsoft Windows XP プラットフォームの場合:

`C:\Documents and Settings\username\Local Settings\Application Data\Programs\Oracle\Secure Global Desktop Client\clients\version`

Microsoft Windows 7 プラットフォームの場合。

[C:\Users\username\AppData\Local\Programs\Oracle\Secure Global Desktop Client\clients\version](#)

4.1.6. Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (自動インストール)

SGD Client が自動的にインストールされた場合のみ、これらの手順に従います。

1. SGD Client プログラムを削除します。

ユーザーのホームフォルダから SGD Client プログラムを削除します。

Microsoft Windows XP プラットフォームでの例を次に示します。

[C:\Documents and Settings\username\Local Settings\Temp\Oracle Secure Global Desktop\clients\version](#)

Microsoft Windows 7 プラットフォームの場合。例:

[C:\Users\username\AppData\Local\Temp\Oracle Secure Global Desktop\clients\version](#)

SGD Client プログラムは [tcc.exe](#) です。

4.1.7. UNIX、Linux、および Mac OS X プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (手動インストール)

SGD Client を手動でインストールした場合にだけ、ここで説明する手順に従ってください。

1. SGD Client プログラムを削除します。

SGD Client プログラムがインストールされている場所から、このプログラムを削除します。

デフォルトのインストールディレクトリは、SGD Client のインストール先が、ユーザー指定の場所か、システム規模の場所のいずれであるかによって異なり、次のようになります。

ユーザー指定のインストールの場合、デフォルトの場所は次のとおりです。

- UNIX または Linux プラットフォーム: [\\$HOME/Oracle Secure Global Desktop/clients/arch/version](#)
- Mac OS X プラットフォーム: [\\$HOME/Applications/Oracle Secure Global Desktop Client/version/Oracle Secure Global Desktop Client.app](#)

システム規模のインストールの場合:

- UNIX または Linux プラットフォーム: [/opt/Oracle Secure Global Desktop/clients/arch/version](#)
- Mac OS X プラットフォーム: [/Applications/Oracle Secure Global Desktop Client/version/Oracle Secure Global Desktop Client.app](#)

UNIX または Linux プラットフォーム上でのシステム規模のインストールの場合、[/etc/opt/Oracle Secure Global Desktop/clients.conf](#) にある構成ファイルから SGD Client のエントリも削除します。

SGD Client プログラムは [ttatcc](#) です。

4.1.8. UNIX、Linux、および Mac OS X プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (自動インストール)

SGD Client が自動的にインストールされた場合のみ、これらの手順に従います。

1. SGD Client プログラムを削除します。

SGD Client プログラムがインストールされている場所から、このプログラムを削除します。これは通常、[\\$HOME/.tarantella/clients/arch/version](#) ディレクトリです。

SGD Client プログラムは [ttatcc](#) です。